成田名所圖繪

一

儿呂4
336
1

太田參詰言

安政丁巳春三月陰刻

安政戊午春三月刻成

成田參詣記

新勝精舍藏版

貸元渡町本
門九号4
336
巻 1

序

[illegible]山[illegible]雲路[illegible]て[illegible]
[illegible]唱仰[illegible]首を傾け[illegible]
心の歩を運ひ[illegible]
[illegible]佛場となりぬ[illegible]
[illegible]再盛[illegible]上人の[illegible]
[illegible]
[illegible]俊[illegible]
[illegible]

にたるをたすけて才乃わらひ
ふれ出ぬる文の志なるをこれ
この道をいまつさめも社原を松されし出
加計たる色をはへてこのやう乃
ものゝとはなりぬこの言ハ世をはし
らぬわらはありてあるべてのことも乃を
あるとして善なるとして古武蔵
家としこの社将門の函蔵なるをひ

ふのことよりわ傳へ来りて立願の
あるのたちを仏ふ詳ふうけて出
世風のこゝろ乃を江考よりわ世家まての
道をもつて神社佛寺の産設を毎
京りて霊を浮るなく出
いて世ふるわ仏世ハ山ハさるも
のをて乃ふれ所このたよりにさ（ぢく
ある道よりて此をこのなれる悦を楽

祈る拙きを忘れて一言を巻の端に
添ふるのみ永七年とりのとし五月

洛西嵯峨御所大覺寺宮御直末
神護新勝寺
傳燈權大僧都法印照嶽

石齋高橋圭書

例言

一 此編ハ先人定俊の遺稿を増補し成田のと伐洩さを記をるもの
江戸より叅詣の道中にある古跡及神佛の来由雅俗を論せず路
順ふ随い書きたるもの也其取捨ハ觀ん人の意まある

一 正行ハ寺社の傳る所ふり引證ハ一字を低書をその間已と得さる辨説
を玉石を論をるふ非す事實の顛倒を正んと欲をるのみ

一 古器金石の真圖を縮寫し故城殘壘ハ其形勢の大畧殘載せて當時世
體の一斑を窺い故人の往蹟を尋る便とす

一 江戸名所畫會に載る所の真間國府臺及舟橋等のこと彼書に今の古
畫をあらぬ社る此編ハ古の故事戰闘とのせ彼圭小古来の頭詠を載れ
ハ此編ハ近代の詩歌を取るさ法る雷同の慊をはくるの覽者怪む
ことなかるべし

一古文書と多く載るハ當時の事實を睹且其年を追てちりぼひ行んも歎しなきにはこの中山舟橋等ハ世ふ知ら社さる所ハ其書數多くて散逸ハ憂も少なき社ハ其要なる物を採り其他ハ目録のみをあぐ

一引書の孫引ハ本意ならねと書ふ多けれとも止ことを得ざるハ其引る人の名と舉く考證ハ書大同小異ハ數書を舉をして一書ふたたぶ其繁に過て觀者ハ煩しきをもひてなり

鄙案ハ△をもつて諸説を別つ

一一社ごとに傳つくり一寺ごとに由来をうくハ限りもなけれハ顯たる所のみをひく典故ハ先哲ハ既ふ引出たるも尋常ハ名氏を標せ雖そ引へきものなき社ハあり創見ハ考ハ片語ゝても必名氏を舉けつゝ免て人の美を成ものを要を元より疑しき事跡ハ姑舍先輩の謬誤ハつゝめて省き雜駁を好まゝ傷徳を恐社るなり

一此編ハ棠陰翁ゝ下總舊事澤田氏ゝ埴生郡明細記等を多く取れりさ社と例ゝ煩ハしきをいとひて亦名氏を標せす體裁ハ名所圖會に倣とも考證ハ一條ゝ俗書を舉ゝ且文外の餘意ハ看官の見解を仰のみ

中路定得識

藏經乎不經
存用乎無用

澤俊卿題

成田叅詣記卷一目次

小松川村
浮洲淺間社　天平十一年八幡古鏡　千葉國胤所寄古鏡
善照寺　藥師菩薩　天平宝字四年光明皇后墓板

市川駅
國府址　養老五年府印　市川城址　古戰場　總寧寺　什物目録　小笠原侯碑
弘法寺　什物目録　古文書目録　古文書　菊池武房旗　古碑　真間浦　絲橋　真間井　手兒奈墓

須和田村
六所明神社　貞治二年經箱　古文書　國分寺　釈迦如来　古瓦　礎石　古笈　古文書

○日本橋 ヨリ市川、四里
逆井渡シ 武蔵葛飾郡
東小松川村
小岩村
市川渡シ
千住驛
新宿驛
市川村 ヨリ八幡、一里
須和田村 以下下総葛飾郡
八幡驛 ヨリ船橋、一里十八丁
行徳驛 ヨリ三里八丁
八幡ヨリ行徳二里九丁
小網町
中山村
栗原本郷村
船橋驛 ヨリ大和田、三里九丁
正伯新田 以下千葉郡
大和田驛 ヨリ臼井、二里
萱田驛
前原村
下市場村 以下印旛郡

井野新田
上座村
臼井驛 ヨリ酒々井、一里廿八丁
角来村
佐倉
本佐倉町
酒々井驛 ヨリ寺臺、二里八丁
中川村
上岩橋村
伊篠村
成木新田 以下埴生郡
成田村
寺臺驛
下岩橋村
公津村
船方村

成田叅詣記卷一

浮洲淺間社　東小松川村淺間崎と云地にあり社領六石慶安元年十月廿四日武藏の国と記す是より前は伊奈氏の墨付と云　毎年五月晦日の神事あり神寶に古鏡二面と藏に下に見ゆ祠官を杉山主膳と称す此家鴻巣合戦の時里見氏の味方甚とくまひ北条氏に滅せら紙一ゑ寛永二年に再眞氏と云

○或云兵部式尾張國驛馬津今は小松川と里俗に云るゑ小ゑ社は小松川ゑ駒津川なるゑ（相馬郡に配松村あり配松は驛馬津なるゑ小見川に見る村なりゑ常陸風土記に榎浦之津便置驛家と見ゆ是を川添の地なるゑ）

別當善照寺に鈴森八幡と云社あり驛路鈴に因ある事ならんゑ湊村にも善照寺と云寺ありて古鈴を藏せり原は此善照寺の退老の寺にてそもあるべしなるゑ社故古鈴を傳へしと見ゆ（湊村善照寺に古鈴は故ありて今は北澤に森嚴寺にありとそ）

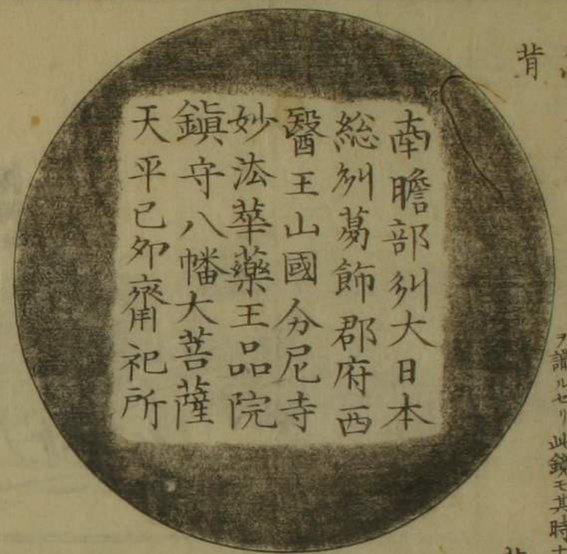
又延喜式驛馬浮島五疋又浮島牛牧とあるは此地の事なるゑ小や船橋村の南と浮洲と云も元は此村の内なるべしなるんと云り

巻四に見ゆ

小松川村
浅間の圖
浅茅集
むとこうふる
古代のこうし
ひさきをみよ
小松の川の
さるめ
をうりそ
初官松山氏
善照寺

浅間社

社蔵古鏡圖

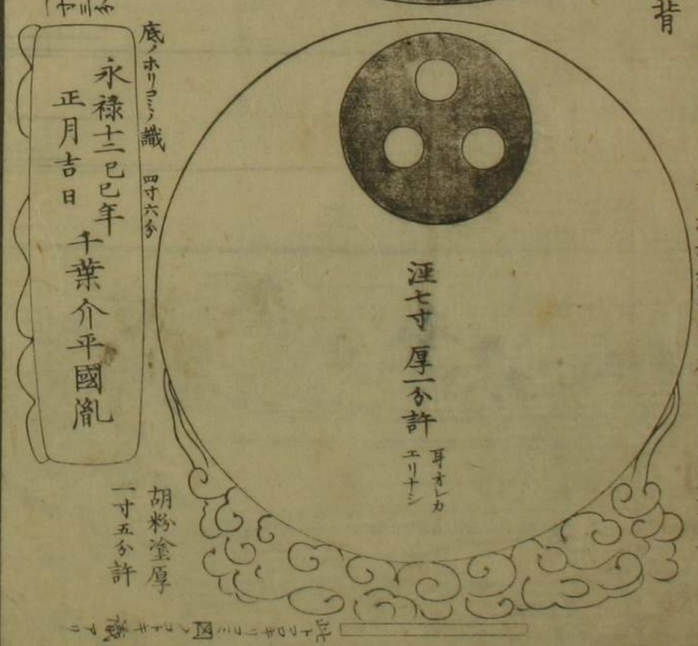


背

徑七寸厚二分弱

或ハ扶桑略記ニ延喜二年五月四日宇佐託宣ニ名曰大自在王菩薩トアリ是ヨリ早罪前ニ大菩薩トアルハ疑ハシ續紀ニモ天平十二年ノ条ト勝宝元年ノ条ト皆八幡大神トアリテ菩薩トナトスヽリハサルヽナカラ此ハ天平己卯ニモセシテハナク後ニ鑄テ寄セシモナルヘシ天平己卯ハ其祀リシ年ラクリ上ケ識ルセシモノト見ヱ日本紀ノ國々ノ名ナトモ後ノ分國ノ名ニテ當時ノコトヲ記シ古事記ト合ヌナトノ類ナラン因リ按ニ八幡村ノ八幡鐘識ニ宇多天皇ノ寛平中石清水八幡ヲ移シ祀レルヲ識ルセリ此鏡モ其時ナト寄セラシヤ字幹ノ摸様鑑倉以後ノモノハ見エサルナリ

背



浅間社ノ祠官ニテハ幡王寄セシ鏡ヲ偽造モスマシナホ神職ノ身ニテ菩薩ノ字ヲハ枉テモ用ユマシキヲシカ識ルシテハモトノマヽナルベシト或云リ

○南瞻部州ハ翻譯名義集に西域記云南瞻部洲舊曰閻浮提洲云く蔵鈔云瞻部此土無相當故不翻唯西域記音中翻為穢樹南瞻部洲北廣南狹三邉量等其相如車云く洲と州ハ俗ヨリ省文なり府西ハ此地國府の西ハ在ヨリ今ハ葛西と称し府西と云ふ つらつら書ヨリ鑿王山云く解後ハ見也鎮守ハ北山抄ハ鎮守明神位階封戸の事と見え加茂社櫻會縁起ハ朝家鎮守皇大明神と見えたり」八幡ハ續紀ハ天平勝宝元年十二月丁亥奉ハ幡大神一品と見え是神ハ位階を授ル始なり海東諸國記ハ孝謙天皇云く天平勝寶八年丙申有虫蠱ハ幡神祠殿柱為天下大平之字ともみえたり當時此神と崇敬ありしこと推知らる」大菩薩ハ延喜式神名帳ハ筑前國那珂郡ハ幡大菩薩宮崎宮名神大と見ゆ又常陸國鹿島の郡大洗磯前崎師菩薩神社名神大ともいひて神号ハも菩薩の字を用られたり」天平己卯ハ十一年なり前の續紀ハ載たる所より二年以前なり寄田の

こゝハ分け祀とも國分両寺の建立ありしハ早くよりのこと〻見え同書
ニ神亀五年十二月己丑金光明經六十四帙六百四十卷須於諸國國別十
卷天平十二年六月甲戌每國法華經十部并建七重塔焉と見えた祀そ
是より先既ニ定たるとなるべしたゞ此鏡の葛と葛ニ分と分に薩と薩ニ齋
と齋と作れる類字體今のもあるとも亡もく祀とと或人ハ云り猶よく考
べし（此社今ハ鈴森八幡と云て善照寺城中ニあり小祀ありて淺間社と稱むと云）

○千葉介國胤或邦胤ニ作る ハ胤富の長子なり初新介と稱し後ニ葉介と襲ひ
稱ス天正十三年乙酉五月朔日家臣鍬田萬五郎ニ為ニ刺殺ス歳七月
五日竟ニ創を病んて死ス年二十九大佐倉村勝胤寺に葬る法号傑心
常林法阿弥陀佛（一云快樂院殿安清淨岸）と千葉大系圖関東古戦録佐倉風土記ニに
見えたり

○本土寺過去帳ニ七月千葉介邦胤鍬田孫五郎狂乱メ御額ヲキリツケ
天正第十三乙酉五月廿九歳逝去（或云鏡磯ノ國胤邦胤ト同人ナリ永禄十二年八十三歳ニテ父ノ冨胤世九ノ時ヨリ赤タ家督セス千葉新介トアレ共ハ

ツナリ トニ云）

醫王山藥王院善照寺　同所ニあり淺間社の東北六七丁許ニあり續紀ニ載る所ニ下總國
國分尼寺ニ即此寺ニ比てなり國分寺の像見合ス天平ニ比普聖武天皇の勅願
にて建立ありし毎國一宇の靈場なり制山と全照尼と云銅牌の儀ニ見えたり善照寺と云ハ此尼ニ比ス号ス
寺号とせしなり全と善とハ一韵の轉りなり本尊ニ藥王菩薩ハ天平ニ比安置ありし
○此寺中興ハ文永中隆範上人なりしそ何の比なりや住持の僧其古雅なるを嫌て是と未寺ニ比西德寺と寺に送り別ニ新ニ
造り替た祀と舊物も今ニ存セリ秘佛なり客ニ比ニ見セ一新義真
言宗にて京師醍醐ニ比三寶院ニ屬ス今ハ此地ニ比淺間社の別當と兼勤む
按ニ此寺寺号も寺地も元の寺なること確知らる銅牌も域内より出たる

文政十年丁亥七月寺普請ニ付地中と堀一ニ取出セ一と云墓版長一
尺二寸濶三寸厚五厘許（按ニ皇朝金石編ニ船史王墓版と載たり銅牌長九寸七分濶二寸二分厚五厘と酷時墓版の制約畧相似たり）

銅牌墓版圖

或云皇大后ト云大夫人ト云ハ重言ノ上貴賤混合ス大法師ト云尼トアルハ男女分爰捧腹スヘシトヽミサレトコレカ當時ノ

真面目ナルベシモシ偽造ナスコレホトノ間違忘付サルコトハアルマシキヽ

天平應真仁皇大后正一位大夫人光明尊靈

下總國々分尼寺藥王品院

且那塚銘天平宝字四年六月經王萬部結願供養

別當傳燈大法師全照尼奉

○八梵の阿字なり大日經疏ニ阿字是一切法教之本凡最初開口之音皆有阿聲云ヽ故為衆聲之母ト此ニ阿字ヲ冠セるもさることなり

正統記等ニ書と参考ニ云ふ太后名ハ安宿姫法号光明子藤原不比等ニ女なり母ハ正一位縣犬養橘三千代　聖武帝東宮のをり年十六にて妃とふり神亀元年帝位ニ即に及んで正一位ヲ授らる大夫人となり　高野天皇及太子を生む天平元年立て皇后とあるは皇朝金石編ニ藤氏家牒を引て母ハ正四位下加茂朝臣比賣初縣犬養宿祢東人ニ嫁し故ありて大帰天平元年八月立て皇后となる時年二十九とあるハ異なる傳へなり　東大寺及天下國分寺ハ　聖武帝の建立ニ社と皆太后の勸むる所なり　高野天皇受禪寶字二年ニ尊号を上り天平應真仁正皇太后と称ス天平宝字四年六月薨年六十（聖武帝遜位のをり帝と共ニ剃髪）是月癸卯大和國添上郡佐保山ニ葬る　光明最勝王經より取社る号なるべし　然ニ元亨釋書光明子の傳ニハ體貌姝麗以有光耀故名焉とハ附會のことならむ　且那ハ檀那ニ社省文なり　翻譯名義集に檀那秦言布施若内有信心外有福田有財物三事和合心生捨法能破慳貪是為檀

光明皇后千人を浴する圖

大日本史天平初僧玄昉自唐還帝賜紫袈裟以為僧正安置内道場后甚寵異頗有醜声云云

當時のこと想ひやら社たり

小中村清矩云續紀廿二に光明皇后正一位を授らるとあり みなもと社と誤なる其證は同書十五に小神亀四年十二月賜後三位藤原夫人食封一千戸とあり同書に天平元年八月詔立正三位藤原夫人為皇后とあり皇后は立たまへし時正三位なり皇后は立玉ひしとき正三位なる社は聖武帝即位のとき正四位を授らるとあり誤なること明けし天平宝字に至り正一位に進しを混したる誤りなるべし

那云々此且那ハ光明皇后と指なるべし」 塚ハ桑滄の変ゆて平地となりしゆゑ
又ハ塚といふ名のみふて元より此平地ゆゑ」 銘ハ韻あるものと云是ハ誌とう
識とかあるべき昔しより金石に識せるもの八概ゆ銘と心得しと見え
てこの識せる」 經王とハ法華經の事なり 一部ハ廿八品 其第廿三藥王菩薩本
事品ゆ此經諸經中王の語あり是より出しならむ」 下総國分尼寺ハ類
聚三代格ゆ天平十三年二月十四日 續紀十三年三月條同 の勅ゆ毎國僧寺施封五
十戸水田十町尼寺水田十町僧寺必令有二十僧其寺名為金光明四天
王護國之寺尼寺一十尼其寺為法華滅罪之寺両寺相去宜受教戒
云々 皇朝金石編ゆ勝宝感神聖武天皇銅版 續紀ゆ天平十六年六月甲申詔曰
詔書を引て妄罵法蓮華經十部と云ふ
畿内七道諸國國別割取正税四萬束入僧尼両寺各二萬束毎年出舉
以其息利支永造寺用とあり然るゆ延喜式ゆ國分寺料五萬束とある
ハ天平のをりなるべ八又一層の冗費を加へしなるべし見ゆ 藥王品院ハ前ゆ

あけたる藥王菩薩本事品ゆ女人成佛ゆ文あり 此品をとり院号と
せしなるべし」 別當ハ一寺ゆ統領して寺職なり下文傳燈大法師ハ僧官ゆ
りゆ別して観るべし 冠位通考ゆ績紀を引て天平寶字四年七月庚戌
大僧都良弁等に請ゆり四位十三階ゆ制を定らる傳燈修行誦持と
三色ゆ分たれ各法師位満位住位入位ゆ四階あり別ゆ大法師位あり
て以上十三階なり」 大法師位ハ四位の格位にて法師位大法師位ハ勅授
満位住位入位ハ奏授なれハ當時大法師位ゆ尊ことなるべし 此尼ゆ
位記ハ此制ゆ立し月より一月前なり」 全照尼のこと考得べ 古鏡の条と
此条とハ或記

國府址 國府臺村にあり 今總寧寺領百石の地と國府臺村と称ゆれと元ハ市川村ゆ
内なり 京書ゆ小符代鴻儘高野臺等ゆ作るもあれと其ゆ非ふ
今國府臺と称する地是なり 豆相記ゆ險岸高峯下帶大河と
此地の形勢を盡せり
○江戸名所図會ゆ國府菖西ゆ地ゆあり永正六年宗長記行東上奏ゆ

隅田川に河舟をて葛西の府に内と半日はかり段あーとそのさ今井と
云津ちゝ浄土門に寺浄興寺に立ちてとあり證とすべしと云（是庄府と後あるま）

○葛飾浦名勝志ハ葛西殘下總國府と云たるもし然とも東鑑と考るに
頼朝卿下總に國府ハ九月十九日より十月二日まて御陣と居ら此夫よ
り太井隅田の両川をゝたるとあ此ハ國府ハ利根川ゝ東の方たるべ
又同書ハ治承四年九月十七日不待廣常參入令向下総國給千葉介
常胤相具子息六人參會于下総國府云々廿八日遣御使被召江戸太
郎重長廿九日昨日雖被遣御書不參間被遣中四郎惟重於葛西
三郎清重之許十月二日濟太井利根隅田両河精兵及三萬餘騎云々
（東鑑一條八畧文なり名勝志ハ引てるまゝにあく）

○和名類聚抄 巻五國郡部 下總國 國府在葛飾郡行程上三十日下十五日 管十一 田二万六千四百三十二町六段二百三十四歩正
公各四十万束本稲百二万七千束雜稲二十二万七千束 葛飾加止志加 千葉知波 印幡匝瑳海上宇奈加美 香取加止里 埴生波乍生 相馬佐宇馬 猨嶋佐之萬 結城由不岐 豊田止与太 ○延喜民部式上ハ大國と遠國とに拾芥抄に田數三万二千卅八町ハ作る豊田郡の下舊岡田延喜廿年豊田ハ改む又千田郡あり

○延喜民部式下に下總國布一千五百九十端商布一万一千五十段鹿革廿張皺文革十張紫草二十六百斤櫨子四合
主計式上ハ調絁二百疋紺布六十端縹布卌端黄布卌端自餘輸布
庸輸布 中男作物麻四百斤紙熟麻紅花○主税式上ハ正税公廨各
卌万束國分寺料五万束藥師寺料三万五千束文殊會料二千束
藥分料一万束修理池溝料四万束救急料七万束俘囚料二万束
兵部式ハ健兒一百五十人○馬牛牧高津馬牧大結馬牧本島馬牧長洲馬牧浮島牛牧駅馬井上十疋浮島川曲各五疋苗津於賦各十疋 傳馬葛飾郡十疋千葉相馬郡各五疋 典藥式進年料雜藥卌六
種 青木香一斤八兩芎藭八斤前胡連翹黄精白芷豪本白薇各
二斤獨活蕎苑桔梗木斛白鮮大戟各五斤枸杞松脂各十斤白朮

眞間國府臺略圖
當時國府ノ形勢ヲ觀ルカ為ニ今日擊スル所ヲ出ス
大橋
國分村
國分寺
國分新田
五町道
國分沼
高地
總寧寺領
根本寺
菅野
八幡
平田
市川新田
須和田村
高地
須和田内
市川新田弘法寺領
鴻三明神
市川村

大學寮釋奠圖

釋菜ハ孔子顔子ノミヲ祭ルトヽ弘安中釈奠供物図ハ丹鶴叢書ニ見ユ

江次第五巻ニ仁平三年八月台記先聖先師九哲像巨勢金岡所寫也云々延久四年三月十四日甲午權大納言源隆俊卿着伏坐被奏大學寮先聖先師九哲等廣像可被修補日時勘文四月三日壬子時也件像元慶年巨勢金岡以唐本所図繪也云々又或説曰吉備大臣入唐持弘文館之畫像來朝安置大宰府學書院大臣又命百濟画師奉圖彼本置大學寮云々

其二

新葉集
妙光寺内大臣

うらゝかのむりしのかゝをうつしきて
位々そたのさくらの
春の夕つき

其三

協律郎

冉有　季路
仲弓　宰我
伯牛　子貢
閔子　子游
先師　子夏
先聖

菅家文草

讃岐聖廟秋奠有感

一邊一拜意如泥
罇俎蕭疎礼用迷
曉雨春風三献後
若非供祀定兒啼

三斤五両藍漆五斤苴茄一斤芍藥十両瞿麦六斤地榆十四両白頭公九斤伏苓六斤續斷四両瓜蔕三両蒲黄二斤榧子大一斗薯蕷桃仁各一斗麦門冬蜀椒各四升附子大五升荏子二升地膚子一升獺肝二具

○同雜式ハ諸國釋奠二座先聖文宣王先師顔子但太宰府者先聖先師閔子騫三座　祝文

維某年歳次月朔日守位姓名敢昭告于先聖文宣王維王固天攸縱誕降生知經緯禮樂闡揚文教餘烈遺風千載是仰俾茲末學依仁遊藝謹以制幣犧齋粢盛庶品祗奉舊章式陳明薦以先師顔子配尚饗維某年歳次月朔日守位姓名敢昭告于先師顔子妥以仲春仲秋率遵故實敬修釋奠于先聖文宣王惟子庶幾體二德冠四科服道聖門實臻壼奥謹以制幣犧齋粢盛庶品式陳明獻從祀配神尚饗ハ古ハ國ゝ釈奠の禮ありしとみえ雜式ふゝく見えたり今ハ跡方もなく其ありしまゝ知れる人なしとそれハ引替堂塔ハ依然として現存れ世俗とハ云なゝら

歟ゝハしきしなら[illegible]釈奠のことハ大学寮式西宮記北山抄江家次第ゝ[illegible]

○三代實録曰貞觀二年十二月八日新修釋奠式須下七道諸國或書ハ云菅家文草ハ仁和二年正月十六日任讃岐守ゝれしとさ州廟釋奠有感の詩あり一趨一拜意如泥蹲俎蕭疎禮用迷曉漏春風三獻後若非供祀定兒啼又慕京集に二月の釈菜金澤文庫ハくゝ行ふゝ三好日向守勝元の許ゝゝけきゝれ隣家梅花といふ題を聖供ゝそくつゝ[illegible]てふゝれやゝゝ友垣の近きふゝ遠きそなゝ梅の下風と見えるゝハゝれ頃静ならさゝし世中ゝたゝゝ釋菜行ハれしことハゝらしくふんある新集和歌集に妙光寺内大臣の年中行事三百六十首の中に釈奠とよめる歌ゝゝらゝ人のむゝ[illegible]ゝれをうつしき[illegible]仰げハ高さ秋のゝれ月年中行事歌合ハ二位中将四辻善成卿ハ釋奠ハ先ゝ唐びとのゝこ

さゝげをうゝえひゝとを以時とゝふまつるゝことゝなれり

○後花園院康正元年乙亥八月十四日丁亥行釈奠

寛永十年癸酉二月十日始釋菜于忍岡孔廟　幕府釈菜之典肪於此○舊儀称釈菜寛政丙辰改称釈奠昌平志云釋典舊儀据明制云〻今儀寛政庚申所定雖專倣唐禮而廟殿仍用明制云〻要之均是一代制作也所謂舊儀亦止謂寛政庚申以前已如寛文元禄諸儀則舊之又舊者○今儀專用延喜式然自諡号配享以至祝文薦品其從時宜且仍舊貫者尚多今儀者寛政庚申二月始行之禮而未更審定者也○學校及釈奠之因年詳見于昌平志

○大學寮唐の國子監小准して帝都の御學問所〻遠近の諸生ゝに集て食物薪等ハ　朝廷より賜ふ寮ゝ内ハ東西の二曹にして東曹ハ菅丞相の御流義なり西曹ハ大江維時の流義の職原鈔曰大學寮ハ四道儒士出身の處〻和漢最重職たり紀傳明経明法算道ゝ社を四道といふ又當寮に八先聖先師九哲を安置し春秋二仲ハ釈奠ゝ東西の二曹ハ菅江ゝ二家其曹ゝ主たり諸氏出身の儒道を此二家ハ訪ふ寮の頭ハ儒中の撰〻當寮ゝ長官ゝ式大學頭と以ふ唐名國子監助唐名國子司業允大少唐名國子丞博士一人唐名大學博士助教二人大學助直講二人直學士音博士二人音韻儒書博士二人書學博士明法博士二人律學博士竺博士二人竺學博士學生四百人文章生三十人得業生十人竺生三十人云〻延喜式曰大學寮ゝ博士に夏冬時服と給ふと云〻むゝ〻ハ國毎に学問所あゝ博士醫師各一人其學生大國ハ五十人上國ハ四十人中國ハ三十人下國ハ二十人ゝ〻医生ハ五分の四と減る大國八十人上國八八人中國八六人下國八四人と或書に見ゆ

○制度通巻十ハ本朝之制毎歳春秋二仲上丁の日釈奠ゝ于大學寮祭先聖先師ゝ従祀九哲釋奠のこと　文武天皇大寶元年二月丁巳の日ハ〻めて行ふ是〻〻以来御代〻修〻行ふまて文明の比まてこゝ社あり〻

云へり　續日本紀　光仁天皇寶龜六年冬十月右大臣吉備公薨云々

先是大學釈奠其儀未備大臣依稽禮典器物始修禮容可觀ト云々

小中村清矩云此文　孝謙帝の頃と指て云るなるへし　然るに或書小室龜三年の頃と　もるハ誤りなり吉備公室龜元年小大將を羅られ二年弘仕さまそるなり

釈奠ノ式ハ享ノ日未明五刻ニ郊社令ソノ属及廟司ヲ率テ先聖ノ神座ヲ廟堂ノ内ニ中楹ノ間ニ設ク先師顔子ヲ首座トシ閔子騫以下冉有マテヲ併テ四座文宣王ノ東ニ設テ西ヲ上座トス又季路ヒ下子夏マデノ五座ヲ文宣王ノ西ニ設テ東ヲ上座トス合テ十一座何レモ南向ノ其牲ハ三牲并ニ兎アリ　三牲大鹿小鹿豕各五加五臓蒐醢料

漢土ニテ三牲ト云ハ牛羊豕ナリ

皇國ニテハ右ノ通リニ替用ヒラル又二仲ノ丁ノ日園韓神并ニ春日祭ノ前ニアタリ又ハ其日ニ當レハ三牲並ニ菟ヲヤメラレテ

本朝釈奠先聖先師九哲圖

冉有　仲弓　冉伯牛　閔子騫　先師顔子　先聖文宣王　季路　宰我　子貢　子游　子夏

高野天皇神護景雲元年十月　教勝大五上疏言云々勅号夫子称文宣王

五寸以上ノ鯉鮒五十隻ヲ用ヒラル三牲並ニ魚イツレモ六衛府ヨリコレヲ進ム又ソノ日國忌祈年祭日食ノ變ニアタレハ次ノ丁日ヲ用ユ諒闇ノトシニハ遺詔吉服ニ從フノ類モ享ヲ停ラルヽナリ

○續日本紀ニ大寶三年七月甲午正五位上上毛野朝臣男足ヲ為下総守大寶三年ヨリ和銅元年ニ至リ在任六年ヨリ之ヲ下総守ト称ス　先ハ国司のこと見ゆ　清寧紀遣勝座国司伊与部小楯求供物　臨時の宰官之後未守介掾目ともに通して国司と称ス

○類聚三代格五左五十三　ニ太政官謹奏諸國守介四年為歴事

右謹撿選叙令初位以上長上官遷代皆以六考為限慶雲三年二月十六日改定四年大同二年十月十九日更據令文弘仁六年七月十七日復慶雲格天長元年八月二十日令介以上別處六年之秩夫吏者民之所帰民者吏之所本頃年良吏之風希聞窮民之憂不息臣等以為善人三年尚可勝残四凶九載難復致功然則治之

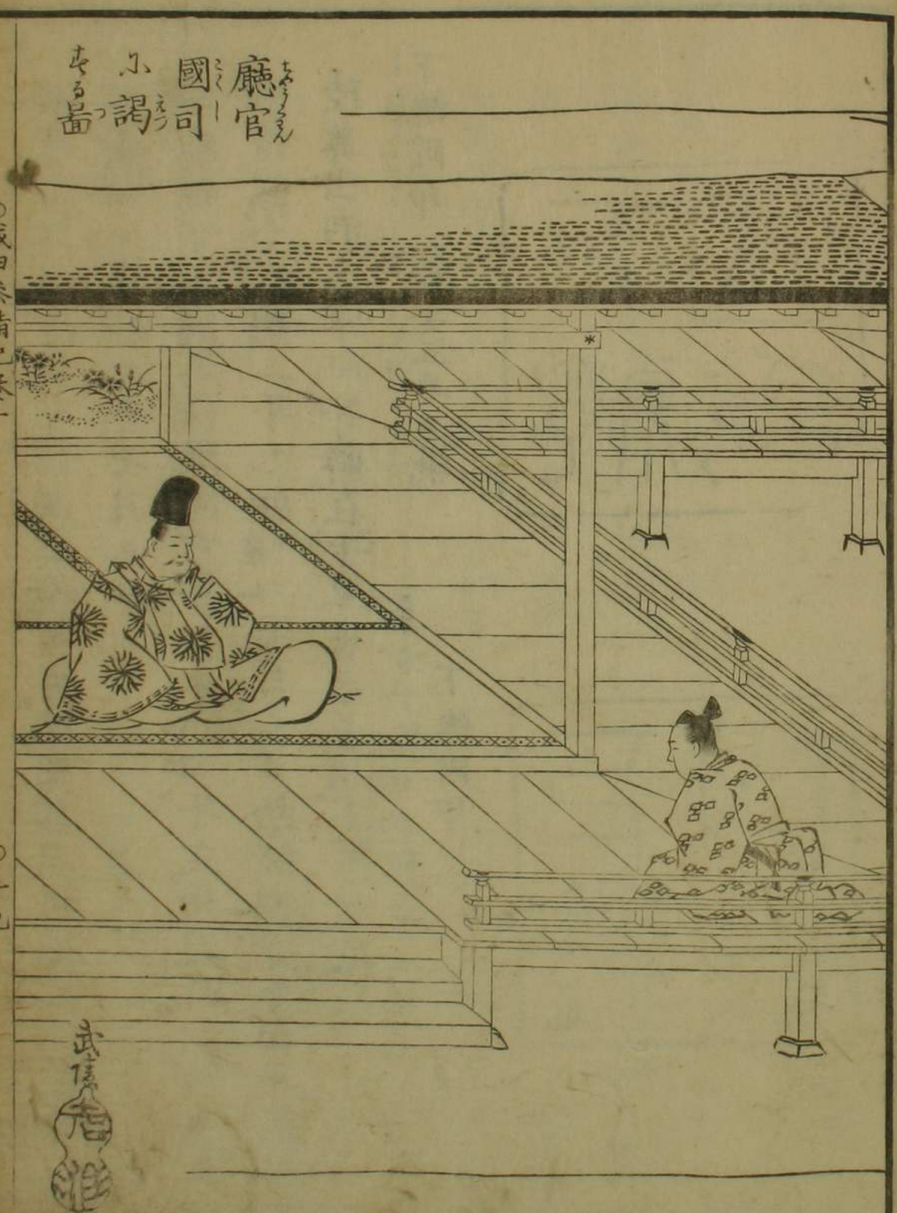
千載集雜下　旋頭歌

下絶のくゝみわまりのぞるを任せて
のぼるをさりなるころ源の俊頼の船長
まつくゝそ　源仲正

ちつまちのやつのうきをわるきてもの
思へとあはよしなほさてたる心地こそすれ

返し　源俊頼朝臣

うきたるをまつのつきをしるしるべ
あるべしれとへたてしあり
義をまをれてむこうへなの
と



能否非年遠近代之清濁賢將不肖伏望國司之歴因循慶雲一用
四年云々 養和二年七月三日
○濫觴抄下 小國司任限同六年乙未 弘仁六 年定諸國司以四年為任
限諸國介仁明三年乙卯 養和二 七月三日勅諸國守介四年為限但
陸奥出羽太宰府等僻在千里書来多煩不可更定
下總國印 養老五年戸籍 集古十種 印章部二
下總國印

石見京師穂井田忠友埋麝發香一 印部
天平勝宝三年五月廿一日
下總國ゝ司解所印

市川故城址 國府臺村ゝる 總寧寺乃域是なり
○鎌倉大草紙小 巻 上杉憲忠より今度中務入道い心の子息實亂自
亂二人を取立下總國市川ゝ城ゝ楯籠る康正二年正月南圖書梁
田出羽守其外大勢指遣し數度合戦して同十九日終ゝ城を攻落し
梁田河内守ハ関宿ゝつゝ打て出武州足立郡を過半押領し市川の城と
ゝる云々 ○市川城又國府臺城と称せり 江戸名所図會ゝ市川城址ハ今知る
ゝろなくあるハ國府臺ももと市川ゝ内なりと知らさるの説なり ○義經記ゝ治
承四年九月十一日武蔵と下總の境なる市川ゝ庄市可と云所ゝ著たもふとあり ○市川ゝ國
府ゝ近ゝある地名と見えゝ常陸府中の傍ゝ市川とゝふ名見えたり其外ゝもあるべし
通し ○夏日記景勝利家奥羽両國検地の事條ゝ武蔵と下總之堺
市川ゝ之渡を越ゝより岐峯ゝ考ゝ江戸川の西を武蔵と称せり古さ名
○東鑑 巻一 治承四年九月十七日丙寅不待廣常参入令向下總國給
千葉介常胤相具子息太郎胤正次郎師常 号相馬 三郎胤成 武石 四郎

源の右大將下總國府小到るの圖

依古圖 板橋貫雅筆 都良手

亂信大須賀五郎亂道國分六郎大夫亂頼東嫡孫小太郎成亂等參會
于下總國府從軍及三百餘騎也常亂先召覽囚人千田判官代親
政次献駄餉武衛令招常亂於座右給須以司馬為父之由被仰云
常亂相伴一弱冠進御前云以之可被用今日御贈物云々是陸奥
六郎義隆男號毛利冠者頼隆也著紺村濃直垂加小具足跪常亂
之傍見其氣色給尤可謂源氏之亂子仍感之忽請常亂之座上給
父義隆者去平治元年十二月於天台山龍華越奉為故左典厩弃
命于時頼隆産生之後僅五十餘日也而被處件縁坐永暦元年二
月仰常亂配下總國云々
十月二日辛巳武衛相乗于常亂廣常等之舟棹濟太井隅田両河
精兵及三萬餘騎卦武蔵國云々今日武衛御乳母故八田武者宗
綱息女小山下野大掾政光妻号寒川尼相具鐘愛末子參向隅田宿云々

○相州兵乱記巻三小弓義明合戦ノ條

小小弓の御所義明の威勢廣大小成しかハ本より
侍る人々て関東を退治して總領家と指越関東ハ長者ゝなる下と仰く
玉ふ由さこそ思ひ侍るに古河殿より氏綱と内々御頼ありて小弓殿對治あるべ
きと氏綱も義明の威勢強けれとも吾ゝ為ハてもあらんと無て思て純
々ハ則御請と被申小國の勢と合を小弓へ裏向の用意あり慶小州
諸家傾け申けるハ義明と申ハ近代無双の名大將ゝて公方の御跡とも継
玉ふ人なれとも清退治いとあらん只和平にるさ侍て未ハ御所小
とゝ立鎌倉ゝもゝ被申候へと説計とも氏綱終小用給ゝもゝ已に打
立と聞えけ社義明聞召て急き中條小馳向て防けとて法舎弟基
頼と御息小弓殿御曹司と先驅ゝて大將ゝて里見義弘と副將軍小笠
原房州西總州ゝ軍兵と催し同國鵠の臺小陣と張て市川と前ゝあて
待掛たり此國府臺の城と申ハ中昔近國無双の城郭去る文明十一年七月

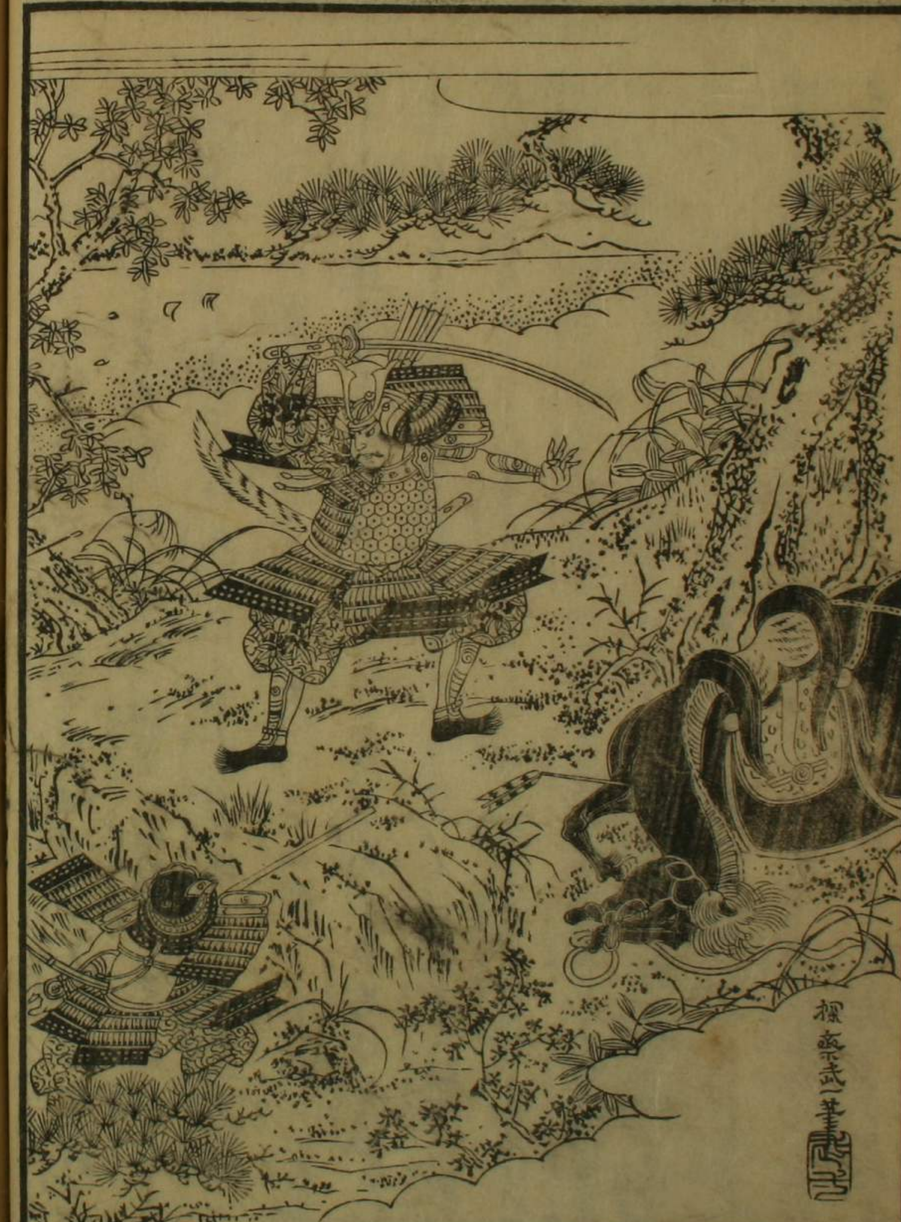
十五日上杉弾正家臣太田道灌う阿井の城と責〳〵とさ初て城ふとり立け
るなりと義明も清馬を被出敵あそしと待るふ去程ふ氏綱ハ天文六年十
月四日小田原を打立江戸の城へつき着到と付玉〳〵ハ方〻より大勢馳加
りて二万餘騎とそ記しそる畧去程ふ明日五日の朝合戦と定り〳〵ハ
先陣ハ宵よりも河の端ふ志の〻ひより明なハ松戸と越んと堤の下にて
ひそける夜已ふ明け纔ハ小田原勢川端ふ打出し一陣ハ箱根殿と初め
として松田志水狩野笠原二陣ハ遠山山中多目黒川金石齋以下の兵雲霞
の如く押寄るふ弓勢ふ先陣権津村上堀江唐嶋以下川端まひうえて
待懸たりとの物見の兵を御旗本へ参らせ申けるハ敵已に川筏越
候甚勢雲霞の如〳〵二三万と見え候味方ふ御勢ふて常ひめくに對やう
の清合戦叶ふ〻〻らんふ小を以て大と打こと難叶只今急に御旗と動
川中ふ勝負と決るる味方引やうふもてふ〳〵敵の先陣半越さんとき

急ふとひしき川へ押こ先候〳〵必御味方の勝なる〳〵と委細ふ申つ
る〳〵事ふ清軍此儀可然と云慶ふ義明ふ〳〵め〳〵大ふ笑ひ玉ひ合
戦の習まて一旦を引ハ虎も行つふ成一旦もをくめハ嵐を虎とふるる
云へり引まねをんハ敵ふ勢をつくる端なり〳〵甚上勢ふ多ふ依るべ
うらんふ兵ふ剛臆ふるべし氏綱ふ武勇我片手ふ及へき何程の事う
あるべき川を渡らせ近くへ引寄吾手ふ懸て氏綱を付取て後ふ東國を
安〳〵治むべし歳月ふ中空変ひあり氏綱をふうをべうらんと扇を手振
りふふ運ふ盡ぬる浅間敷さたとくていとん方もなし小田原の先陣ふ慶ふ
颯と馬を打入て弓の石弭束弭取連て四馬ふ流をせき上て向ふ岸ふて懸
上る推津隼人佐鹿嶋の郡司以下散こに亟合命を惜まん乱合て切つ突川
火と散して戦ひそるう懸立ら纔て引退く慶ふ里見義弘逸見山城以下
強弓勢兵ふめき叫く射立け纔とも小田原勢事とも せん進こ計ふ両方

より射る矢ふ先陣數百人痛手負て進兼たり是と見て先ゑ社大將ふ号の
御曹司と法所社御弟基頼おのつく切くうり五ふ氏綱御覽ゑて爰に
深入する先手の大將社旗とみゑて入立て討取往や者ともと下知され
ハ伊東朝倉楽原石井その一人當千の兵ども両方ゑ取先て散ゑに責々
往ハ大將社馬の平頸二太刀切ら(る)大居ふ伏ハ下立て戰しゑ腹の下内胄
吹返社迦社二ヶ所突き氣盡力たゆゑて終ふ討死したまひゑる逸見入道義
明社御前ふ參りて申ゑる八今朝社軍ふ御味方社軍兵其數討死仕りぬ
其上先手の大將御馬ゑ見候ゑてつく洗通ゑ赤淚討死ゑと如
何樣味方社負軍なゑ〳〵爰と義て重て兵と催して今日社恥と清め
んと云ひ往ハ義明先ゑて強勢社程を汝等ふ知らせんとゑまつ先ゑ
市て打て出つ其日社裝束ゑ赤地の錦社ひたく往ふ相のすそゑふ物
と打ゑきゑらあやたとし社鎧さて乘國行三尺二寸の面影と云太刀二尺

七寸赤銅作社金代の御太刀二振ゑ法城寺の大長刀とゑさ短ふ
取り鬼月毛と云名馬ふ御紋社梨地の鞍置て紅社大ゑさうみ白あゑこの
馬ハ唯一三四ん ふ進てゑみ玉〳〵ハ佐ゑ木み府二郎以下馬廻二十四騎と
ゑゑ〳〵てゑみ出たり義明の御馬ハ奥州の葛西殿ゑ六郡一の名馬
とて去年進ら世ら往たりけゑ三戸たちは早馬ゑ名馬社逸物ゑれ
ゑハ本ゑゑゑゑゑゑやゑ社乘手にて人ゑりてたん計先立て敵軍〳〵駐へ
あぶゑのゑゑ〳〵さゑゑと章と踏たゑ〳〵切り後ハ是て大將とりてけれい
前後ゑり取篭吾汁とゑんと責け往と本ゑゑゑ馬強ふゑ打物の達者
ゑ往ハ自武勇社〳〵ふ膝往たゑと憑て軍ゑ天早りふて逃る敵と追立
ゑ切て後〳〵味方社吾もつゑゑけゑふ大勢社中ふ逸入ゑゑふ小田原勢社
中ふ安藤と云者莨皮社黑き鎧ふくすりそゑゑの甲に鍬形うつゑ
さゑりゑゑゑゑ大長刀と拔てさ〳〵かは義明と目ふゑ事近くとゑりける

小弓義明戰死の圖



霊と義明御覧して弓手の方へおり立て開さおふ〻〻打甲の忠こ
ろのくびりをうけて首を下と打落し餘る太刀ゆて左ゆ廻る敵を拂ふ
甚及小胄を冷し敵敢て不近さるけれそ岡小打寄て續く後方を待
玉ひ鎧ゆあ〻る血を笠符にて押拭ひ息をゆて居たりける爰ゆ義弘
以下の兵ともゝ大将の行衛を不知氏綱の旗本と懸合けるゝ五十騎ふ
打ふされたるの山さゝくもちかひふ後行けるい猶皈りて義明を助んとす
る兵も少なりこハいかゝと見る處小田原の中にハ州無双の強弓と聞た
る横井神助と云者甚ゆ三浦の城代ゆりけれハ初めより房州勢と相戦
ひ手ゆ者多く討れ不安思ひて義明を目ふけあやまて寄けるゝ先度
の合戦ゆ先ゝゆ兵多明ゆ懸立られ魚鱗ふも不進鶴翼ふも不固して
辟易して見えける時いかゝ此敵を唯討ゝらんとせハ討もらしなんと
討て後さんとて馬ゆも乗て下て笠符をくゝ畔と傳ひ藪とゝたり

近付寄て三人張十三束忘れふ引たる長ハ三浦の守後代横井神助と申
者にて候受て御覧せゝと云もてたゝに丁と射る義明のせんたんの板と
うけて射通し矢先三寸あまりゆ射貫け れるもの猛将ふれとも一筋
ゆて目くれ太刀を杖ゆつき立ゝくゝふゝろ死玉ふ横井うつほをたゝて
矢さけひし敵の大将をハ討留たりと叫ひける處ふ御所の御馬廻り三騎
馳来り神助を討とらんと切てゝる神助ゆ同心ゆ林平左衛門と云者馳来り
馬より飛下り向敵一騎討て後し二人と追散ゝる間に神助馬ゆうちのり
打つれてゝそ切合ゝる甚聞ふ松田弥二郎直違ふ馬と馳懸て一太刀打て
當倒し義明の首をバ取てけるれしものの大将なれとも運盡果てやうくと討
れるふ佐〻木四郎遥見ハ佐野藤三郎野以下御馬廻深入して戦けるゝの
大将れ御討死と聞て今ハ雅れるの為ふの軍とゝくゝと各〻馬を乗放し大
将れ死骸を枕とし自害をる外の事あらしと各〻馳行處ふ遥見山城へ

道をおひぢさら社くさぐりゐ立矢少くおりうけ馳来て申けるハ皆こ自害し
ま山慶武士社布望ありゐ強社とも小弓ゐ幾し買しゐる君達とハ催ゐハ隠し申
べき宮てやらくと生捕申て名将の御一跡と匹夫のひつゆゐかけん事口惜
うゐべし歎きてもあるゐ行り此度の余と金し君達と義し申謀と所し時
節と見合せ先君の恨と死後ゐ報し玉ゐ君もう社し〳〵思召〳〵と理と
盡して申社ハ此人こ一同ゐ申ゐゐハ口惜ことを宣ゐ物ゐゐ爰とのゐ社
二度催ゐ面と合をべき時自害せんと行慶ゐ山城守て申ゐゐハ是ハ各こ
のあやまりなり死と一途ゐ宮てゐゐ近ゐして安し謀と万代ゐ残をハ遠ゐ
して難し〳〵と云へゐ唯ゐ〳〵と進ゐ社て此人こ相使ひゐ小弓〳〵脇り若君
と御供申御寶物とゐ御殿ゐ火とゐゐ房州へこて義り社ゐ山城馳寄て御兵
況二騎義明社御死骸の邊こて馬ゐ乗下り扇こと上け是ハ此日比鬼神の
やうに申ゐる鎮東の將軍源義明と聞えけせ玉ひし御内の侍遠ゐ山城守

と云者也小田原方ゐ我と思ハん者あらハ押寄て首とと社と扇こ挙て招き
け社こ小田原社住人山中修理亮と名乗て近こと寄け社ハ山城馳寄て御兵
氏綱社家人なゐ〳〵と見ゆるそ吾首とつて高名ゐせゐと打てゐる山城
ゐ郎ゐ〳〵と討せ〳〵と馳双ゐ〳〵ゐゐ修理亮ゐ郎等あまた馳来て取籠
け社ハ終ゐ山城守修理亮ゐ首とと社と扇こ挙て振逆意諸人龍蛇社毒と怨社万民虎狼の害と歎しゐ忽ゐ被亡て一跡永
く絶しゐハ氏綱の武功の程感せぬ人ハなゐりける〈法華経寺所蔵氏政文書に甲斐国一戦之初成陣所記〉
十一月廿四日と見ゆ氏政此地も出張せしゐや 本土寺過去帳七日小下総國相模豊島合戦大弓上意御父子
基頼御三人始申千餘人之打死也 天文七年十月申酉二時之御一戦也行義為雑兵得樂西已
○同書 巻四高野臺合戦條 小武州江戸の住人太田源六資高其弟源三郎源四郎と謀
て房州の里見義弘と引合江戸の城と責落し永く豊嶋郡と知行し先祖
道灌社跡をついて江戸の城とゐ〳〵と言合せ此程社大事ゐ社ハ左右

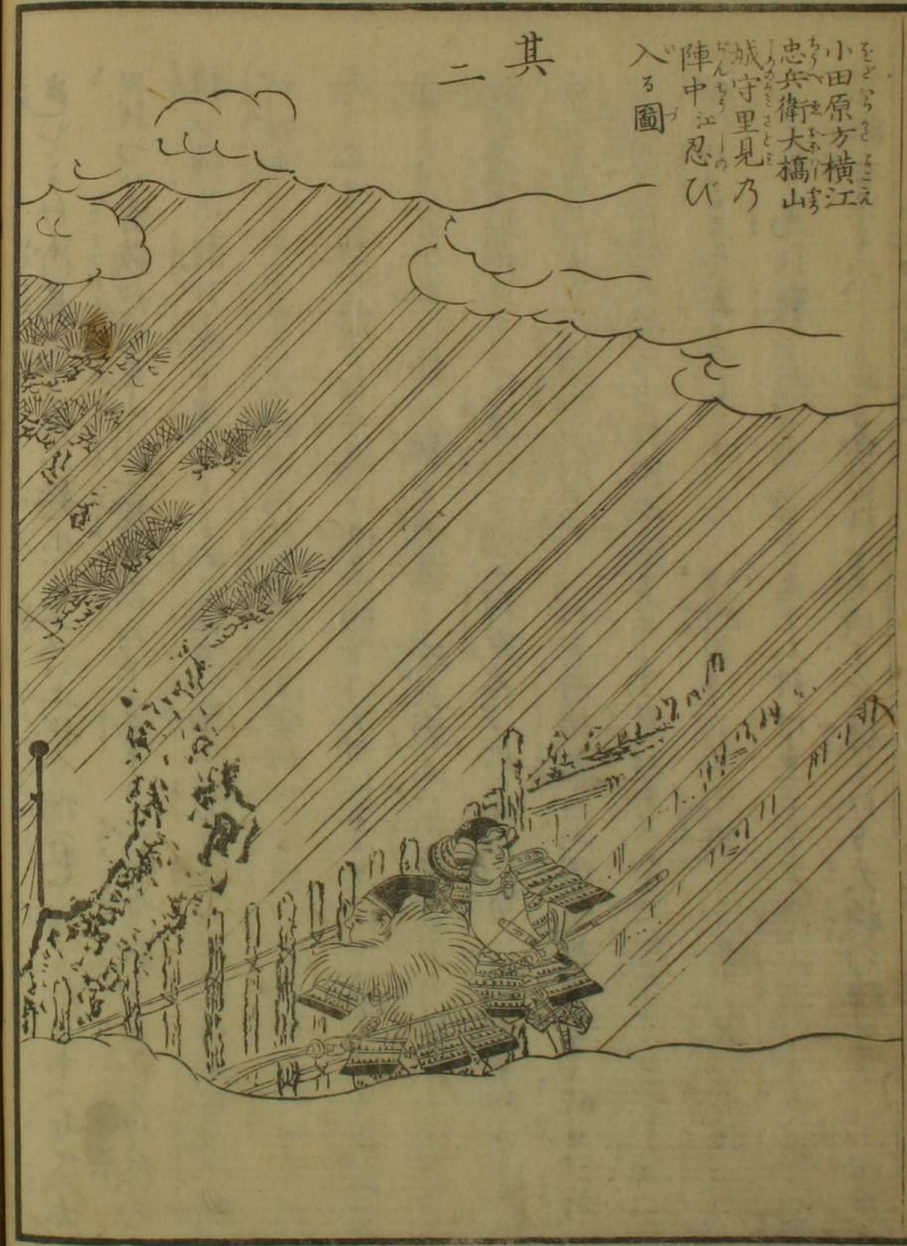
ふくハ云ハしとて源六ゥ善提寺寺と云法華寺の番神堂ゥ集り神ゥ
と呑こ此事思宜免ぬまゝ二度返ゝべらるゝと敬白し扱同名美濃守入道三
樂齋方ゝ此由と云つゝ三樂大ゥ悦ひ則房州ゝ使者と立て里見殿と招ゝ
義弘一國ゥ勢并總州ゥ軍兵と催して總州高野臺ゝ出張ゝ程ゝ法
音寺僧太田兄弟ゥ密談と聞て檀師ゥぬゝと忘れ此由と小田原ゝ注進ゝ
依之江戸城ゥ遠山丹州太田道伐の討手と賜り已ゥ押寄ゥ間源六兄弟
相圍相連して夜ゥ入ゥ紙岩付ゝ行ける氏康御父子不日ゥ打立玉ひ鶴
ゥ臺ゝ沛發向ある江戸遠山丹波守富永三郎左衛門ゥ金高城亂原ゥ小田原
勢ゥ負先ゥ早ゥらめき川の端まて押寄てそゝたり永禄七年五月七日
早朝氏康父子伊豆相模中武蔵ゥ軍勢と引率し押寄玉ゝハ曉天ゥ及ひ
房州の先手ゥもとゝり入て中だんゥ備たり富永遠山高城ゥ敵の引ゝ
思ひくんさしもに高き鬨ゥ臺と一文字ゥ押のぼりて一息ついて見ゝたゝ

ゝ其ハ敵ハ雑所ゥ引請んと中たんゥそなゝたゝ去程ゥ江戸の遠山丹波
ゥ父子富永四郎以下切ゝ入凱ゥ色をあらゝとひしゝく責のぼる房州方
ゥゝ柘木大膳先駈ゥ黒川権右衛門川崎ゥ云大力ゥ兵今度敵ゥ
りし太田源六同源五郎同源四郎長南七郎ゥと云ゝりとの若そのとも一
面ゥ打てゝる小田原衆ハ敵をうけゥ清次第ゝに退登らんとゝ房州衆
ハ敵と見ゝるし大石と云ゝらぬく一度ゥ叫て切て落す太田源六郎遠山
丹波守ゥ父子ゥ勢を誘ゝりて打てゝり遠山を初め進む兵六騎切て落
し其ハ相州無双ゥ強兵とさゝこえし志水ゥ渡り合てゥ棒まて太力兵
おゝ紙ゥいゝひて山ゝのびける餘ゥ無念ゥ紙ハ又太力まて打ばお紙めしと云錢の
棒と八尺ゥ作り常ゝ秘蔵しけるを後ゥ軍ゥハとりと七寸まゝりの大棒を
打ゝりく打て廻り如何ゝも志水めを打落さんと乗りまゝる處ゥ志水
終ゥ不見依之口惜やとて甲ゥ鉢胴中をさらハゝあゝるを幸ゥ打てまゝる

其一
北條氏康里見義弘と國府臺にて合戰の圖
渡頭雲氣起輕雷濁浪北來勢
欲頹鼓棹中流思往夏滿天風
雨暗鴻臺
無名氏

程ふ人馬多く打ころさる太田下野守と云人小田原勢の先手なるもの源六
くありさまと見て是ハ吾聟ぞ源六ぞと思ひ々む乗りて如何と源六
ハ正なき謀叛をこけるものれ音味方ふあれハ何と思て先非を悔て降参
せよ余計ハ助くべ〜ホ今日ぞ振舞いくえ〜わけなくく馬ハ何の科まうて
打そ人とそ打たの馬を多く打倒ハ条罪作りなるべしと言葉をとけれハ
いくも宣ふものなな人計打べし清て見よと開打ふとうの下野を下と
打つ下野を太刀ふて打そむくんと志ふれとも大力ふうたれく何ふハたまる
べき前なる深田へこうひ落つ是と初て松木大膳以下切て懸り突て入ける程
小富永三郎左衛門山角四郎左エ門尉中條出羽守河村修理亮を初て小田
原ぞ先勢百四十騎討死し色小引色小成し慶小北條上総介地黄ハ幡ぞ旗
とふびう〜横合ふ切てうる里見殿の先陣荒手ふ懸たてら紙ぞとろふ成
てひて入二陣入改て切て出る変に氏政御覧して上総介討をふつけと

邑とうけ御馬と一えん小懸出し玉へハ上総介猶氣を得て敵ぞ中へ打て入太
刀ぞつハ音銃炮の邑山川小響ぞひたし〜ホより上総介敵を目ふうけ猿の
林を傳ひ龍ぞ水を得たるこのぬく四方ハ面小当り戦ひけ紙ハ房州勢五十騎
計討死し上徳介ハ木村堀内佐板横江間宮以下主従十四五騎小打なき紙
たりこうハ鎧の袖甲ぞ吹返小矢三筋とりけにくると退て進こる氏政自
身うけつ玉ひ終小敵を退散し晩ぞ戦小ハ小田原勢打勝こるぞ紙とも
朝の軍に利なして遠山と初め討死ぞけ紙ハ房州勢ハ悦ふ事かさりふ
日已小暮けまこる相引小引く時ハ日房州衆ハ小田原勢宮あて昨日ぞ戦
小随ふ紙侍大将とも討死ぬホ多手負ぬ者ハ今日休息して手負を
助け明日こそ寄んとそ油断志けるふ大将ようる畫ぞ前ハ名鎧ぬく
べらす馬ぞ鞍をたろへらこそとふ紙けまとも夕陽小及びしらハ戦ハ宮
て明日たるべしとて高ひほとをたして休こける大将の陣屋小ハ小田原



其二

小田原方横江忠兵衛大槁山城守里見乃陣中江忍び入る圖

方ゟ先手富永遠山と打取目出度とて盃と出し酒盛半ばなり處ゟ小田
原方の物見由井源三殿の内横江忠兵衛と大橋山城守とて二所まやう一ゟ
忍の上手ゟて敵陣へ忍ゟ入此躰と懇ゟ見て帰り申上々ゟ大将軍氏政
老軍とめさゟ社太公曰兵勝之術密察敵人之機而速乗其利復疾撃其不意と
云へり今敵昨日ゟ社勝軍に悦び油断して居酒盛を初めて最中也折節西降
り霞たゟひき物の色を不見ゟや方寄て責ゟさハ何ゟ子細もなく味方
の勝軍ゟ〻〻早く打立候へとて氏康氏政二手ゟ成て西方ゟ〻〻切て
ゟり射立ゟゟゟ社色をあゟて叫て責ゟへバ棄ゟ社如く房州勢ゟ今敵害の
んとハ思ひもよらぬ多く叫て油断ゟゟる程ゟあゟてゟためく亦用心ゟゟる
も有ゟ多ゟても味方ゟ社兵ともに引立ゟ社散〻ゟ懸負置民部少輔同兵衛
尉柾木左近大夫同平六同平七菅野甚五郎切ゟ出突合名乗ゟみ一足も
不去討死ゟ小田原勢ゟ社中に山角伊豫ゟと云もの申々ゟハ昨日ゟ社合戦ゟ

柾木弾正左衛門と名乗りて度〻乗り出し味方ゟ社兵を多く突ゟ社条口惜
存候今日ハ柾木弾正ゟ首をとゟゟゟさものをとて皆ゟ語りけるゟ傍輩とも
ゟゟゟ人ハさやう社言とゟたるものなりと制しゟるゟ果して柾木弾正左工
門ゟ首をとりける大将ゟ弘散〻ゟ懸ゟ小懸ゟさ社自身太刀打し馬とも射ゟ社
うちたゟに成ゟを見て安西伊豫ゟと云人吾馬より飛下り義ゟを
乗セ申て歩立に成てつゟ申山中にあつより上総ゟ社山へ義のびける義ゟ
御馬御ゟ社鞍置射殺してありなゟら主ハ無りけゟゟ大将ゟ社討死とゟ
思ひゟん勝山豊前秋元将監加藤左馬允長南七郎鳥居信濃ゟ息悪左工
門佐貫伊賀守多賀越後守引返〻三千餘人討死雑兵以上五千餘騎こそ
打社々ゟ今度張本太田美濃守同名源六兄弟の内申小戦とて薄手少く
負けゟ社ハ東西小ゟ社て引て行今度里見殿ゟ社代の重寶大きつ方小き
つ方と云太刀此合戦小失小々ゟ此事小田原に聞えゟ社ゟ小捕の太刀刀

其三

如蘭詩集

城堀蕭寂古禪宮
覇氣消亡嵐氣濃
徒見苔紋埋石榔
曾聞松樹掛銅鐘
菱花鏡暗龍池色
蒲草茵留鶴駕跡
江水于今惆悵在
東流日夜咽淙々

右國府臺懷古

友野子玉

社内と様に御尋ありしうとも不見けるとてきこえし茅打折や忘れ
小不出とかたり云々 節文へらりさ川ハうるえてそれ誤ならん今國府臺の裏道とうん
てふそと云ふ恵比川のことふくし江戸名所圖會小天狗日記のくゝ社
瀬の誤なとも
安國山總寧寺　國府臺村小ある寺領百廿八石五斗餘 天正十九年辛卯十月地
禪宗曹洞派関東總録司三ヶ寺の一員なり本尊釋迦如來開基佐々木氏頼綱 國府臺村と情村とふあり
三年創建 開山通幻寂靈和尚此寺もと近江國馬場村にありしを天正三年北條
氏政はとらいふて関宿守和田の地小移りて元和三年内町の地に
移る然るに内町の地を屢洪水に患ひりけれ共寛文三年又此地小移れり
猶創建以来寺地の遷移 今俗川庵と云 寺其址なり
後小あげたる錦織小詳なり
○此地い往古國府の舊址なりて形勢斗絶境地廣大なり道傍小石に下馬
札あり佐々木氏賴綱に賜ところと云 和治の高れありて遠山弥三郎と記しあるし小笠
原左衛門佐基綱墓石あり 今越前勝山の城主 當時関宿小移る兵部塾考に小笠
原左衛門佐基綱墓石あり 當時関宿小封をうまとり建
ることなるに○後に山小石擲あり往古國司の物なるへし昔時一貴人石
擲を堀らをすひしをるを出たる茶釜銀に鈴なと寺寶にふしあるよ
或書小見えたり○此地小大田道灌に植しと云榎の大木二株ありを下馬
石と相對せり
房總遊覽志小載たる所に什物目録
一南蠻鉄茶釜　一金銀鈴　一懐中守毘沙門天
一七寶焼茶椀　一赤栴檀釋迦　一青江下坂鑓
一白玉水呑　一豹皮陣太鼓　一古法眼元信畫 松竹梅三幅
一水府義公書　一酒井雅樂頭某書　一隱元禪師書
一西行法師書
大日本國東海路總之下州葛飾郡風早庄市川郷國府臺村安
國山總寧禪寺者

永平元禪寺六世孫　通幻和尚開闢陳迹四所之中第三之道場
也原其濫觴永徳三癸亥之歳佐〻木六角判官氏頼創建精舍
於江州新庄樫原郷而屈請我　通幻和尚住爲百爾器備僧寶
競集兵物換星移至八世越翁時佐〻木氏族滅矣惟時諸國爭
國列國蜂起因茲亨禄三庚寅駿州今川氏之家臣朝比奈備中
守教翁住于遠州懸川乗安寺者年于茲是蓋避兵之謂歟至十
一世義翁天正三乙亥北條氏政仰翁之道徳於本州關宿寄附
梵地越聚材爺工殿堂玉成再盛通玄道化大振新豊玄風至十
七世骨山元和三丁巳初夏中旬洪水逆流陸沈梵刹也達之
台聞
台徳院殿大相國別賜梵地賑以米俵千於茲重建梵宇而倍前規
也然其境猶挾于二州之間也洪水漲則動羅馮夷之災滿堂毳
侶造次愁之顛沛苦之衆中議云前軍覆轍夫盍鑑邪自非易地
我果魚乎予謂夫推己之心啻匪我
佛仲尼亦好之請移地而令後之住者無愁便相攸於本州國府臺
訴之
征夷大将軍源朝臣家綱公於茲寛文三癸卯仲秋下浣　台恩飛
下賜地者方二里程為此境也舞士峰於檐間臨東海於階下杜
翁所謂窓含西嶺千秋雪門繫東吳萬里船者也實一方勝概也
又境内有法王坂傳云往昔葬法王於此地到于今石棺猶存也
吁何世邪雖無傳記口碑所傳夫豈空邪我室從来傳有法王三
昧秘訣憶天機後熟者乎衆與歡抃而移席矣夫以
先佛所盧皆設法器鐘為之先拘留石鐘祇園金鐘寔是亀鑑者也
故予欲建立一宇而預鑄梵鐘雖然單力以難辨普叩真俗以成

其功叨綴俚語呂充其銘云尓 銘文累

寛文三龍輯昭陽單閼黄鎮吉蕚

前永平現總寧二十二世智堂叟 光詔 謹誌

冶工 御釜屋 堀山城守清光

真間山弘法寺 真間小あり寺領三十石 天正十九年辛卯十月日 蓮宗池上本門寺に屬す

六門家の一なり本尊釋迦如来 冨城者忍の作なり 樓門の金剛力士ハ運慶の作と全躰黒色ふして他ふ異なり 開基冨城常忍所

山ハ日頂上人 伊与阿闍梨山本坊と号す 父橘伊与守宣時母ハ駿州蒲原弥四郎國重女懐胎の内宣時死去ー冨城五郎亂継小嬢に正安元年養父常忍継示寂 日頂哀ふ堪ずして

八月十二日こを出さり給ふ こゝ其終る所とも云ふ 一説ふ三月八日弘通の号ふ ○ 弘法寺過去帳ふ日頂上人

出て返らぬと執ら見なるや墓ハ冨士北山本門寺の西北三丁斗正林寺にあり 嘉暦三戊辰八月十二日寂

年八十六 此寺元ハ密家少て空海ゆ舊跡なり 故ふ弘法寺と号す 弘法大師の像西新井惣持寺にあり

改宗の頃ふ ○ 真間の地も元ハ市川村の内ふて文明十一年遠山某の文書に市河の内真間とあり

○元亨釋書巻一ふ釋空海姓佐伯讃州多度郡人父田公母阿部氏小字貴物年十八上大學偶逢沙門勤操受虚空蔵求聞持法延暦十四年登東

市川城址圖

康正中千葉實胤拠之

或書ニ總寧寺ヨリ東ノ方往古國府五郎某ノ居城アリシカ云或云國ノハ真州在名ヲトレルナリ香取郡大崎村ニ國ノ五郎ノ城址アリュノ地ヲト國係ナシ誤ナルヘシ

○千葉大系図ニ下総國菅師郡國ノ郷ノ与ストアリ何レカ是ナルヲシラス

相州乱記ノ市川此ヨトヲ云ナルベシ

鐘鐵ニ法王ヲ此ニ葬ルト見ユレト法王ヲ葬リシニテハナク逆修ナルヘシ時道鏡ニ媚テ國ノ國府ニソノ逆修墓ヲ建シナラン可成談ニ國府某ノ所ニ石柳アリカタワラニ車塚アリ法王塚ノ所モノミニナラスセルハ道鏡ナルヘシ云々

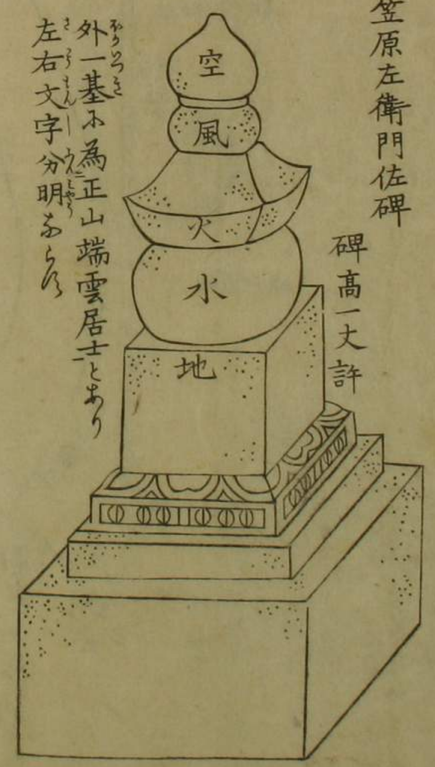
江戸名所二上世ノ人墓トス國司任所ニテ死セシ人墓ナトニヤ

或書ふ鎌倉以降戦争の衢となりて公家赴任も止果て優なることこの葉も傳ハらず文明ふ太田道灌城ふ取立て白井と攻るにふるとせり天文ふ小弓公方の軍後ハ坯茶に属ー其家臣加次氏城主たり加次五郎有久の時ふ豊公ふ田原の軍ありて後 御當家ふ属ー御家人豊嶋某城主たり其後ふ今の安國山總寧寺と関宿より此ふ移ちりこゝに殺ふられハ國ノ五郎とゝ云ハ千葉の一族のとりそ云ふ加次氏のことゝ云ふ

左側

一世代置之　一世通切り永徳年中のものと見ゆ
近江より下絶に運び来たるなるべし

山城并堺
辺ニモ下馬石
アリト山州名跡
志ニ見ユ



小笠原左衛門佐碑
碑高一丈許
外一基ハ為正山端雲居士とあり
左右文字分明ならず

伏以為本慶良然
大姉奉造立這塔
様以至心合掌之至
心恭敬之御願是地
依善巧速菩提到彼
岸必信良久而白
中在黄金充一國
于時寛永十八辛巳暦卯月吉辰

大寺壇受具足戒二十三年從遣唐使藤加能到長安城請青龍寺東塔
院内供奉慧果阿闍梨果喜曰我先知汝来相待久矣兩部大法秘密印
信皆悉付授又召供奉画工李真等十餘人圖金胎諸曼荼羅一十鋪鑄
工楊忠信等新造道具集經生諸秘經大同元年帰朝業和二年三月廿
一日入定年六十二

○類聚國史百八十　承和二年正月壬子大僧都傳燈大法師位空海奏曰依
弘仁十四年詔欲令真言僧五十人住東寺修三密門今堂舍已建修講
未創願且割被入東寺官家功徳料封戸千戸之内二百戸甲斐國五十戸下総國百五十戸
以充僧供為國家薫修利濟人天許之△以上二書ふり考るに下隠小寺を創ーこと
其報恩ふ為後小寺と建和泉寺とも名つけ
ーーーわ比丘古の百五十戸社内ならん

○御書三十　真間釋迦佛御供養遂状

釋迦佛御造佛の御事無始曠劫より来たり顕ます　まさね已心の一念三千

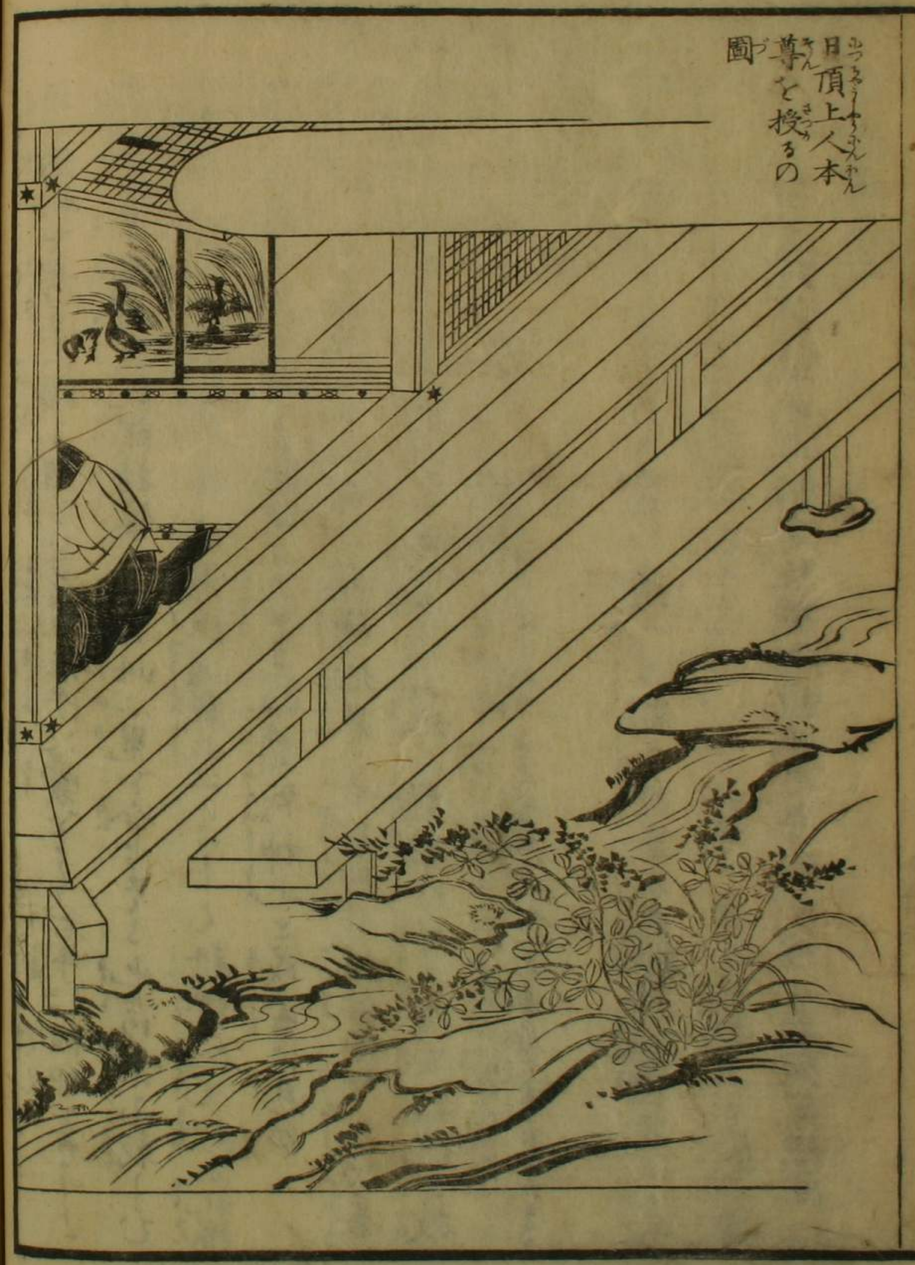
の佛造り顕はしまする馳走ふりてたゝみ奉せ候てや欲令衆生開佛知見乃至
然我實成佛已来は是也但佛法御開眼法御事はいそき伊豆房ともてて
や〜参らせ給候へ法華經一部御佛法六根ふるゝ入奉せて生身法
教主釈尊ふ〜参せてうりて迎入奉らせ給へ自身并に子に非さ
れる何人を在俗所領の者なるは大進の阿闍梨うきて候へ後く
もたゝみ結縁〜まいらせ候へ〜いつそや大黒を供養して候〜其後より世
間ふけうをしてたてまつるは此度は大海法志ほの満るが如く月法満するの如
く福きゝあるを命ふゝく後生は霊山と思〜召せ　九月二十六日　日蓮　進上

冨木殿御返事　（什宝目録十世分佛法厨子入　高祖開眼冨木殿造立之也）

録外御書巻七　大黒送状　大黒供養料慥給候畢（本文畧之）　三月十三日　日蓮　冨木殿江

○大黒は大己貴の音也佛を負ひ玉ふるは古事記ふんえ軍神なるは非切記
ふみんたる伊勢ふ大黒若あり牧聚本源に大國玉也と之り○大黒天

神は儀軌を考るふ頭に帽子を蓋り左手に嚢をとり右手に槌印をなすよ
しみ摩竭持槌飢饉持袋といへは此二鬼を合せる也若葉ふ載しむ
○大黒天は南海寄帰傳佛祖通載ふにくはしく新譯仁王經ふ祀塚
間摩訶羅大黒天神青龍疏ふ大黒天神闘戦神也と或書に見ゆ
子院十餘あり覚り坊大林坊真浄坊養善坊亀井坊松本坊東坊善
林坊浄蓮坊外ふ華蔵院又寒宮といふ地ふ龍泉坊安立坊安國院玄授
院等は門末ひり（市川村の小字に根本といふ地あり此地ふ根本寺あり元和ふ寺は文院と
永享十二年御直文書に真間根本寺別當職享徳五年御房文書真間根本寺
同年鶴亀書真間法華堂根本寺と見ゆ）
○寺記ふ舊天台宗りてありしふ權大僧都了性冨木胤継は向雅ふうけ退
院せ〜ふ後は目家とふるといふ○寺社鑑ふ身延派献上巻數住職
寺中并末頭評議之上相定住職御禮無之年頭御禮大廣間獨禮座一
同御暇無之



日頂上人本尊を授るの圖

什寶目録抄 要を摘む

大黒天 高祖作 厨子入　頂師劍　松蟲笙　袈裟 往昔天台宗の時住僧權大僧都了性法印の所持ふり

高祖一代五時之圖 二幅　同御消息 二幅　同御消息 五通　尊師御消息 一通　十六羅漢圖 晁殿司筆ト云　光圓卿消息 一通　楓樹遺支 一卷　菊池武房旗并由緒書寫二卷　源義家弓傳書

古文書目録 此年次迷へるもの多し姑く古きふり改む

元享三年五月一日下總國八幡庄蘓谷郷云々　平花押　沙弥祥仙
久永七年卯月廿日古来之檀那之事云々　沙弥常舜
天文四年乙未菊月三日於當寺家以後之迹云々　花押
永禄十二己巳年二月十九日制札　亂則　亂辰　亂辰　亂房　亂房　平輔亂　滕亂　亂隆
無年号十月十三日制札
無年号辛巳九月十九日制札
無年号丙子二月十四日制札
享徳五年六月廿日下總國八幡之庄真間弘法寺云々
享徳五年六月廿日下總國云々散地如前云々
享徳五年十月廿五日下總國八幡庄真間法華堂根本寺領事
延徳四年九月一日下總國八幡庄之内云々
天文二年五月一日當寺之散地之事云々

天文七年六月廿八日下総八幡之庄之内云々
四月廿日御門前之御手作云々 天文八年己亥
無年号四月廿八日真間山弘法寺
無年号卯八月十五日真間御寺下之草刈云々
無年号六月一日還住國府真間法堂事云々
嘉暦参年三月十四日真間御寺御寄進田地云々
観應元年七月十一日奉寄進下総國千田庄云々
三年卯月四日蘓谷郷秋山村内云々
康暦三年二月二日國府真間法花堂地ホ事云々
永享十二年十月廿五日下総國真間根本寺別當職云々
享徳五年六月十四日下総國葛飾郡八幡庄之内云々

祥仙　逮山　原式部大夫亂清　杉左々外四人連名　貞亂　左衛門尉　平亂継　大隅守平亂□　平花押　亂直　亂房

古碑七株 正和三年卯七月日　暦應第五天　文和三年甲午七月　明應八天紀六月廿三日日隆
天文断碑　建武二年戊寅卯月　明徳三壬申五月七日

真間浦 又入江蘆井ノ須地なといへり 継橋 ゑ上真間ふそひ須和田へ打廻しある所の沼澤昔
への真間の浦ふり此社南の方小細流あり細流より猶南社汚田ゑ昔ハ真間
社浦の内なるべし

△此逆社村も其あとなりと云伝ハ非なるべし むうのゑハ土地を踐て論ずべきあり
○太井川の川下に欠真間村ふり此地と因なるにや。此地小溜井ふり行徳領十二ヶ村ふ名注す此溜井社東の方と堰向村と称ゑ元の字ハ
薩塚と云〻〻 舊千戸社位置ありし〻〻

紅塵集上春部　さくら社 江やまもうけん面影きぬぎぬのふうふ花の下社 千陰

同秋部

琴後集秋　月ふかう物ものうう(むう)みしまの秋へにの秋のうらなみ　春海

入るとりのこゑうしろわをのにひはりなみつゝを秋の月傾さぬ　真淵

真間継橋　弘法寺の下に細き流ふ打渡せる二つの橋に中ふる真間(まうら)ふ橋

なり(南留別志ふ継橋を継橋と云ハ誤なり)　(大原に継橋越後ふ古の継橋の歌もあ秋をやはり真間に継橋なるべし)

茅葉集の安能於登世受と云歌に意ふてる馬なるも徒果せしとく見ゆれハ

古へハ餘程大なる橋なりしふや

○安能於登世受由可牟古馬母我可都思加乃麻志乃都藝波思夜麻受可欲

波牟　万葉十四相聞往来歌　○暑解ふ豆に音せるを川に狭こさふハ板一ひらうち流して豆をと

(先り其橋とあたりて忍て妹ふ行んふ豆音せに渡らん馬そうろと云顔ふ)

紅塵集秋　さら浪ふ玉もかりそんいさ月をみわるる志ら波ぢ　枝直

いまも行思ひそわるるをとあるようかよひ別くんまくのつゆけ　千蔭

春臺文集巻三　継橋記　(江戸名所図会ふ里信ふ云るのを真間とあるに誤ふ云り)

古昔しふ仏徳乃ちなの物

敵名しを仏道とあるひを上ハ

頌賀ふ二歳具ふて世捷成談

すなわちそれ世を上ひとくよ

十寛剃乃作と信作せるをたて

いうまでもなくとも世あとは

坐禅の思と為て十年をみて

世ふ長者となりをたくを

方作のひて世るをこのふひ

うくきまそとよくく秘訣を

めくきをたて当世今世

得現果熟孚ふ穴賢く

世の富士門弟者大世人

ふ所ふ旅立和尚

於波門流五人社人ふ

本をを下作ふ問ふ書ふ

義論伏ふ作伏ふ

康暦二年庚申三月廿三日

孤雲

永仁五　十二月三日　景弟

此御文ハ其のち三ヶ年おくれて一ヶ年をハ
ちてハ月命日ゆゑ　ちひさきけしきなり
二ヶ所ハ佛ましまさぬゆゑ仏前を
中てのくくはうくあるよ世をさ
かきのまるところの印
此御文ハ御ゝ信して日蓮聖の
比丘尼と供養ゆゑ　供養ゆゑ

三月　紀結文事

右月樹ゆゑをくてまつりおもふ
ほどに　思ひ出ていとも尚おもふ
あれども　思ひいでたんとすれども
みをのがれつまいせ　ゆゑ
とまれ　ゆゑ　月樹ゆゑまいせて
うちなくくくくくくくくくくくある

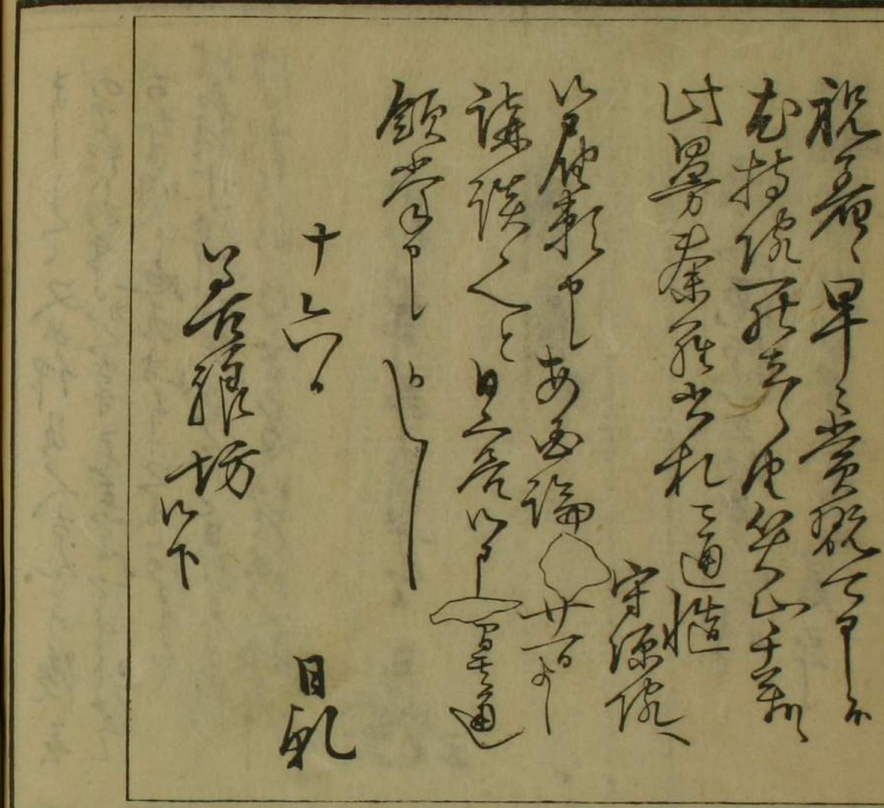
まくくて又めゆゑ　ゆゑ
のゝ紀おゆゑ　ゆゑ
ゆゑ　ゆゑ
ゆゑ　ゆゑ
ゆゑ　ゆゑ
ゆゑ　ゆゑ

正和元年　月十五日　日蓮

真間樹

ゆゑ　ゆゑ
ゆゑ　ゆゑ
ゆゑ　ゆゑ
ゆゑ　ゆゑ

玉勝間七十三丁九代隆泰
の子蒔池十代武房一説に
文永和安両度の合戦ゆゑ
對馬筑前におゆゑ蒙古
人と対平け日本ゆゑ武名
を異国ゆゑ施せり十代時
隆十二代武時法名宗教阿十
三代武重十四代武士一説に
又武十五代武光と見ゆ



日頂上人所持劍

一尺三寸七分

一尺六寸八分

東都之東入總州四十里許其地曰繼里曰槁名也繼之為名區尚矣自山赤人槁蟲生歷世詞人皆詠歌之何咏歌詠歌氏胡氏胡者何女子名也曷為詠歌氏胡其說未詳以里人所傳氏胡早喪母繼母不慈氏胡事之孝繼里瀕海水井皆不食唯有一井寒泉可食氏胡日汲焉以養繼母有少年見而從之閱其人就閱氏胡家者數矣繼母覺之以為盜而氏胡為之內應於是毆氏胡辭不釋毆之幾乎死氏胡乃走自投槁下而死里人哀之收而葬之封土樹松以識之謂其槁曰繼槁謂其井曰繼井以懲繼母之惡也墓也槁也井也於今猶存云其後僧空海東遊留乎此里人因造寺焉海謚弘法故号弘法寺後廢有僧日蓮修之今見存繼槁在其下繼井与胡墓皆在其東北百步之內自數百年之後海變為田繼里今南去海可二十里登弘法寺則平野漫々東方不見其所極西望東都則城市人煙

廻在目中實勝概也弘法之西北有總寧禪寺官利也未至弘法里所有関河爲東岸赤壁數仞可觀矣余与藤東壁以丁酉之十月遊継里東壁之季父爲僧在弘法寺回宿其房而帰既悉故事矣於是乎記（或云此遊係享保二年）

鈴木長頼所立碑銘（長頼八當時日光奉行を勤めしと云日家の信者見る所其子孫今要人と称し高五百石山伏井戸に住す）

継橋

継紀與廃　維文維橋
詞林千載　万葉不凋

鈴長頼立碑勒銘
元禄九丙子仲春
住持上人日貞識

真間井　同所北の山陰ふ鈴木院と云草菴ふ傍ふあるる古のものなりや詳

なるに（手児奈明神畧縁起ふ亀井坊の境内ふあり井を亀井と称すと云）

真間井

瓶甕可汲　固志何傾
嗚呼節婦　与水冽清

鈴長頼立碑勒銘
元禄九丙子仲春
住持上人日貞識

名所今歌集上　平

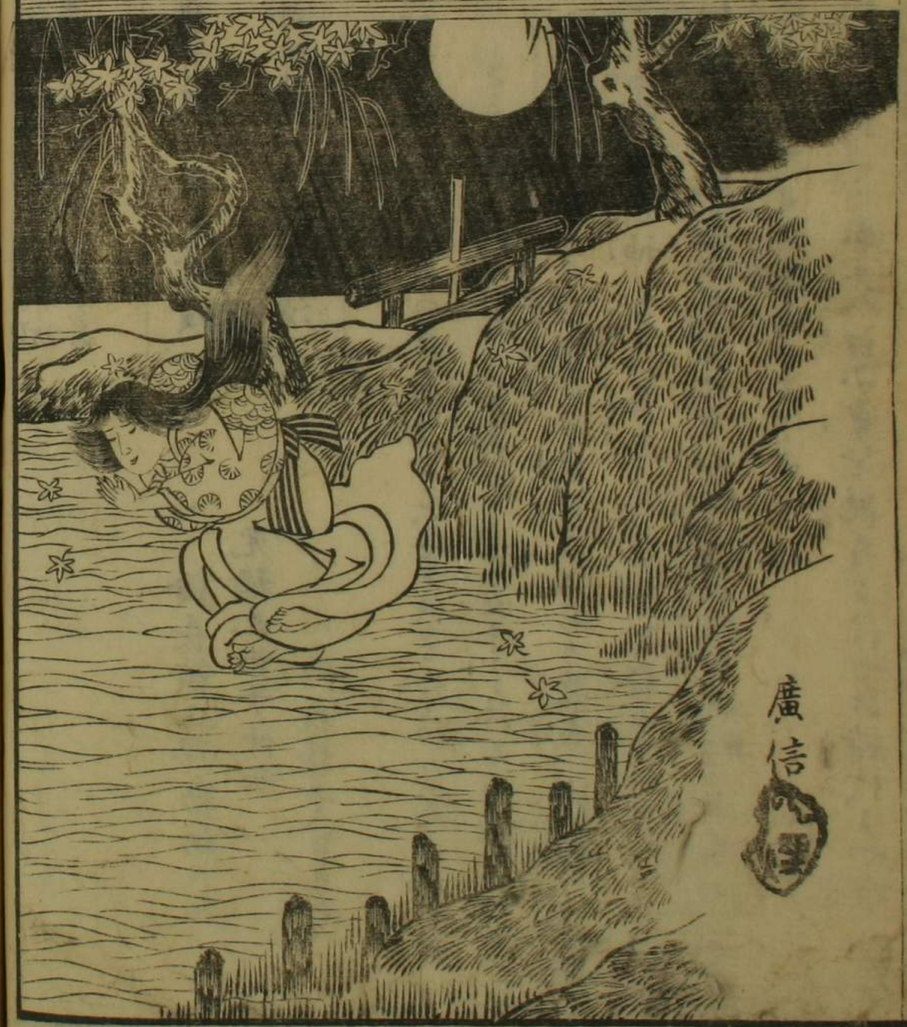
うつしかも亀井の清あ茅代ふくむとそ清くるあとのらめやそ　春郷

同

さゝ左れ石ふもふしやにそうめたるまゝ苔むるの水　蘆菴

手児奈墓　或書に継橋より百歩許り東北方にあり墓表ふ松樹一株存ぜり後ふ傍ふ祠を立て手児奈明神と号ふ毎年九月九日を祭日と為とのり伝まりたるるふや相傳ふ文亀元年九月九日弘法寺在住日興（一作興）上人此祠を創建ら為て因ふより其日を祭日と為と云

○手児奈別記ふ抑てふふ入江ふ身を沈たふいつふ時代まや有ん

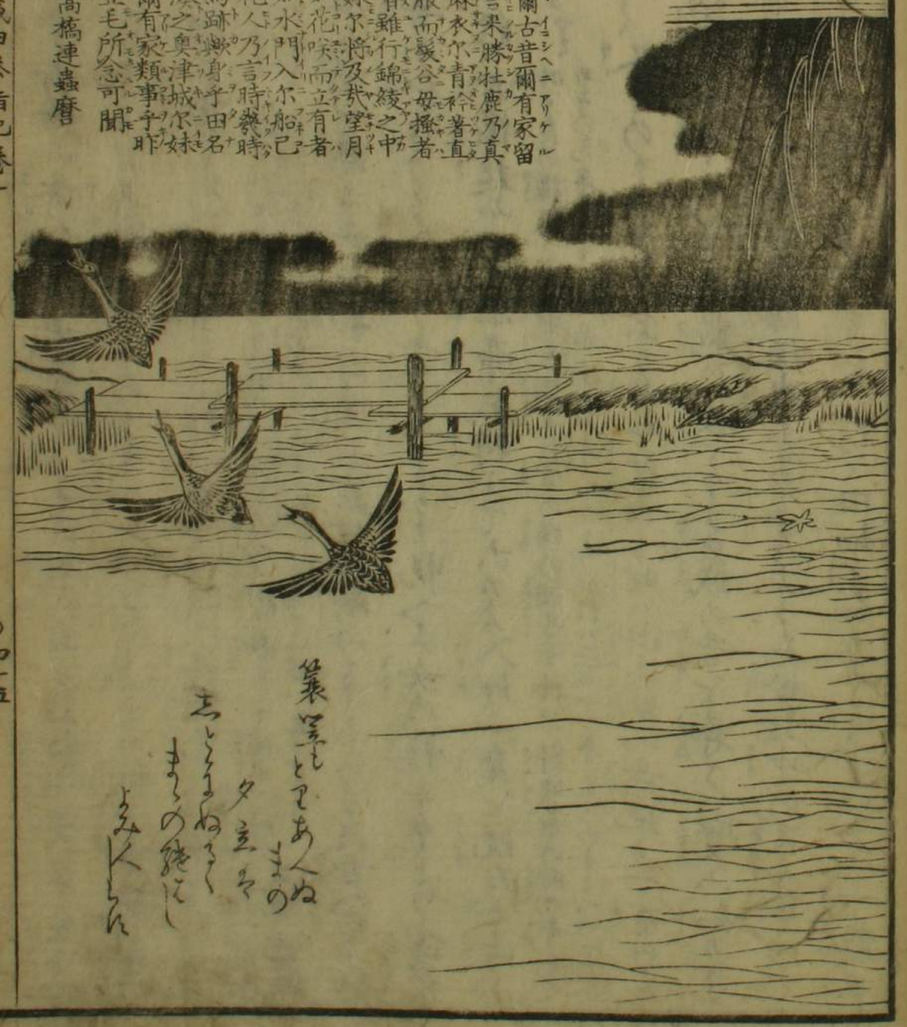


手児奈真間の入江ふ身と投る図

桂園一枝拾遺野草集

こゝろゝの
若けるもの
女郎花
そのゝけ
さへも
こゝ花し
咲遠ゝふ

景樹



萬葉集巻九

鶏鳴吾妻乃國爾古昔爾有家留事登至今不絶言来勝壮鹿乃真間乃手兒奈我麻衣尓青衿著直佐倶礼乃袋者縫服而髪谷母撮者不梳頭乎谷不着雖行錦綾之中丹曬有麻布毛妹尓恋及我望月之満有面輪二如花矣而立有者夏虫乃入火之如水門入尓船已具如久帰者具礼人乃言時柴時毛不生物乎何為跡歟身乎田名知而浪音乃騒湊之奥津城尓妹之臥流遠代爾有家類事乎昨日霜将見我其貧毛所念可聞

高橋連蟲麿

蒹葭とてあしぬまの
夕ぎゝ
ちとゝゝねゝく
まゝの跡こし
よゝくゝん

と尋ぬるに葉考に赤人の手児奈を詠る歌ハふるき朝に至りて天下の始の頃の歌なりと甚歌に古ふあり云ハん歟いひつらんハ此少女ハ飛鳥岡本の宮の頃に有し成へしと云て　舒明帝の時と治定せり　その證ハ天平十四年作

ことゝもて紙ふるきものてあるとゝふ歌とてこれ在世の時の歌として岡本の時と　又葉考

治定せる岡本の宮ハ　舒明天皇ありてより元年より天平元年にいたりて一百一年なり

解に本居の説を挙るに此歌ハてもいふ在世の時のものにあらず古へのものなり

てこゝろと吾に似たりと人ぞいふ　ハまことのこと悦る女の歌なりといふ説

なるべし紙ハ古縁起に　允恭帝の時にさいたる入江に身を洗たりといふ

ふるく叶へり　此たの様ハいろ〳〵飛鳥岡本の宮の頃の調子なる紙ハ　舒明帝の時の事と定

といふんるなり　允恭帝之年ふるのわれハ二百十六年ふるのものてあ

剛ゆるなり　又そのゝ〳〵手児奈の身を洗たる時ハ此山既に寺地なりや有けん

又在家の地なりやなんと千載の後なれども載の昔を尋るハ實に紛りさ

きとしたるもあ紙ともに桑田碧海須臾に変ふるたとへの世の中のためさまたくく

地主度こうるる時ハ墳墓そもそも紙て田畑となりやもしいなて千載不

改の地あるんさ紙ゝてこそなる身を洗し已前より此山ハ寺地なりてこそありけ

めと思ふる。推古帝廿四年帝不豫に太子精舎を営て祈る　推古三十三年に至りて寺

帝疾愈百億多く寺塔を建といふ

ハ僅に四十六所僧ハ八百十六人尼ハ五百六十九人といふる葛飾の真間ハ古の

國府なり　和名鈔五十下総國國府在葛飾と云今真間山より一丁ばかりたりて府中六所ありて社あり

師と云國府墨ありて五所あり古へハ府中

ふること國府ハ縣なりて朝廷の御料地なる紙ハ居付て國政をとる國造縣主な

とあ紙ともに又都よりも諸役人の往来することあ紙ハ鄙なりても至て繁華の

所なり　古事記　成務天皇の時代小建内宿禰為大臣宗賜大國　遠朝廷とも鄙の都とも

山國之國造市宗賜國之堺及大縣小縣之小縣ともあり

いふほどの土地なる紙ハ　畧解三十七遠朝廷ハ其國の國府又西國にて大宰府と云ふ同十八年越前之國府と都の都とゝなり　推古卅三年

なる後ハもとの此山寺地とゝなりしなるべし　國史畧　孝徳天皇の下に　推古いまに佛教壊　推古

三十三年　舒明元年　或ハ　推古帝の時ハいまだ寺地とハふらしとゝ　礼礼典漸摩とあるも一證とゝなるたる

聖武帝紙天平九年の後寺地となりしてハ大地を指ることし　聖武帝の天平九年三月詔

海州造丈六釋迦像及菩薩像并寫大般若經一部六百卷是國分寺の權輿なりとあるこれ

此頃ゝハ諸國ハ寺を多くなりしこと　舒明帝元年より天平九年ハ百

百九年　推古帝以来漸こゝ僧尼を出ほく寺院そあちこゝ行ひ
佛教を弘通する靈場ゝて何宗と治定しがたるるハなるゝ也とみゆ當山も
延暦二十四年ゝ後小天台宗と定りけんゝその以前何宗と定りし事ハなりし
とみゆ　今俗手児奈ゝ身を沈たハ　光恭の時とせハ天平九年ゝ云り三百十六年なり
推古の時に寺地とるゝも三十六年より　光恭ふさのゝ時ハ二百十七年ゝ地を定
ゝて二百年余ゝ久しきとへて墳墓と守り失ハさらんこしハ両説のうち　舒明
の時ゝ沈れたりとせハ身沒して百七十七年ゝて法華ゝ延暦廿四年より文永元年ゝ二百三十八年と極て當山お守護神となる抑
り文政十三年ゝ当りて一千二百二年なりるゝて人ハ腐肉ゝつきけるに其名ハやゝ朽ゝ残
手児奈ゝとゝきハひるふゝ終て身ゝ衣たるもゝ女なりゝめく千載の後名とゝし
られあふきたふとゝこと貞婦の徳とハひるゝ衣たるもゝ豈凡人の為ふ所ならんやゝ載の後名とゝし
なるゝ豈たふとゝさらんや
ゝ豈たふとゝさらんや

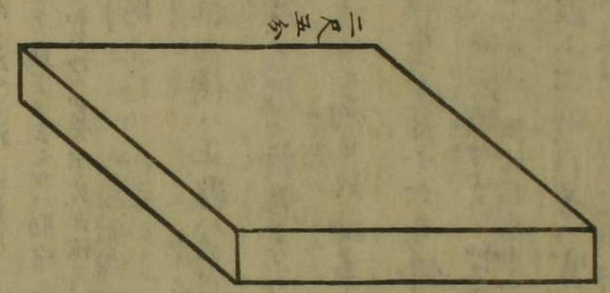
真間ゝ手児奈ゝおくつき所　楊門ゝ向ひて右側ゝ古松樹あり是てこゝ葬れくつき所の
らんと萬葉集巻三山部宿祢赤人の歌ゝ吾毛見都人尓毛将告勝壮鹿之
間間能手児奈之奥津城處　万葉考ゝて云ハ果子のハを畧ゝ云てこハ愛児の
こと云ゝ云ハ女ゝ本居の説ゝてこハ東の方言ゝて三四才より人に嫁ゝるまでの少女の通称なり
菅麻呂の説ゝてこハ男女ゝ通ゝて幼稚の子とも母の手とさらぬゝとゝふ母の跡とゝ

のゝ社手児のゝひ坂とつふも有ゝてもゝ
ゝふゝてゝもゝてこハ男女ゝ通ゝ称ゝ社ハ女ゝ
つゝ古事ゝ記傳ゝオクトハ地下ゝ云ゝツハ助字ゝキトハ死人ゝ蔵ル処ゝ名ゝ紀ゝ
棺槨ゝ字ゝキト訓ゝ和名抄ゝ四聲字苑ゝ云棺所ゝ盛屍也和名比止岐ト云
六所明神社　同所ゝ坂ゝ手児ゝ坂とも云ゝ　○清矩ゝ云ゝ
年八月十二日ゝ葛　社領十石　天正十九年辛卯十月此朱印もと
飾郡と改ゝ　社ゝ傳ハ正殿ハ大己貴命合殿伊弉冉尊素盞嗚尊大宮賣
尊布留之御魂彦火瓊ゝ杵尊なりと云　景行天皇四十一年五月五日の鎮坐
なり九月十九日ゝ二十日ゝ両日ゝ神事あり　祠官ゝ桑原和泉と云
○東鑑巻一　治承四年十月十六日ゝ條ゝ相模國府六所宮云ゝ
総社傳記考證ゝ六所社号ハ寛文三年ゝ下部朝臣兼連卿ゝ書て給りし
ことあり云ゝ

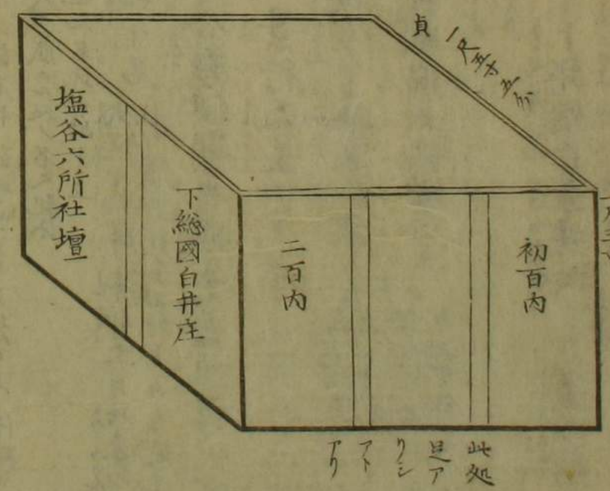
香取郡並木村神宮寺大般若經箱

文字ハ切付なり主箱ともおなしく外二箱三百内六百内とあり○按ふ府中六所社の社領の朱印ハ有德公すてハ印幡郡と記しあるとこ此塩古と因あるとこ

塩古ハ印幡郡根古谷所門用草岡田四村の地と称せり



角ハ皆布キセ漆塗ハケタ作リ



七月小田原古書譜并牛久城番帳所收
作付古印無譜ニ載ス御朱印
大切保存ス　正雪稿ニ
高野山ニ
南部人足扶助ニ中ニ
の者ハ高橋伊予ハ
笠原下野ハ

文月十五日

原和田
寺社奉行

牛久城番ハ天正ニ始ル

亂吉印ハ代ニ用シト見ニ常陸江戸氏文書ニモノ例アリ

春村ニ印二顆アリト見ニハ小一ハ大十リ共ニ亂則代通シ用ヒラレタリ

制札

於下伝国諸国家
軍勢甲乙仁濫妨狼
藉之事

右条々堅令禁制
下令違犯者可
処厳科状如件

未
九月十七日

薩中六所宮

神主

里見義通永正十八年高城越前守胤
廣ヲ打テ胤廣父子其臣畔蒜彦五郎
田島図書助等打死イ本土寺過去帳
里見系図等ニアリ後此地北條氏ニトラレ
タリト見ユ

府中六所トアルニテ此地方ノ國府タルコト
瞭然タリ

禁制

大軍勢甲乙人不濫妨
狼藉事令停止畿内
国郡郷村寺社
不可犯之状如件

乙

山崎右京亮

神主

印文禄寿應穏

猶外三通アリ同文ナレバ畧ス但
名当ハ府中六所トアリ

六所之大明神御寄進事

右神主佐屋兵部丞五拾坪

永代入寄之上地頭方ゟ

中　　細井金蔵

　　久光

須賀神主殿

中中ホ揺りゟ条
の儀ニ付而被返
地方ニ付而候
神主ニ八可申
被申しお文相違
无之様ニ申付候
ニて可被為候ニて
候し
九月七日

ろくせうの事
神主へ渡し候

此度小田原之儀
付而為御祈念
家督之事彼人へ
上せらし候め仰

卯月十日

次郎
神主殿

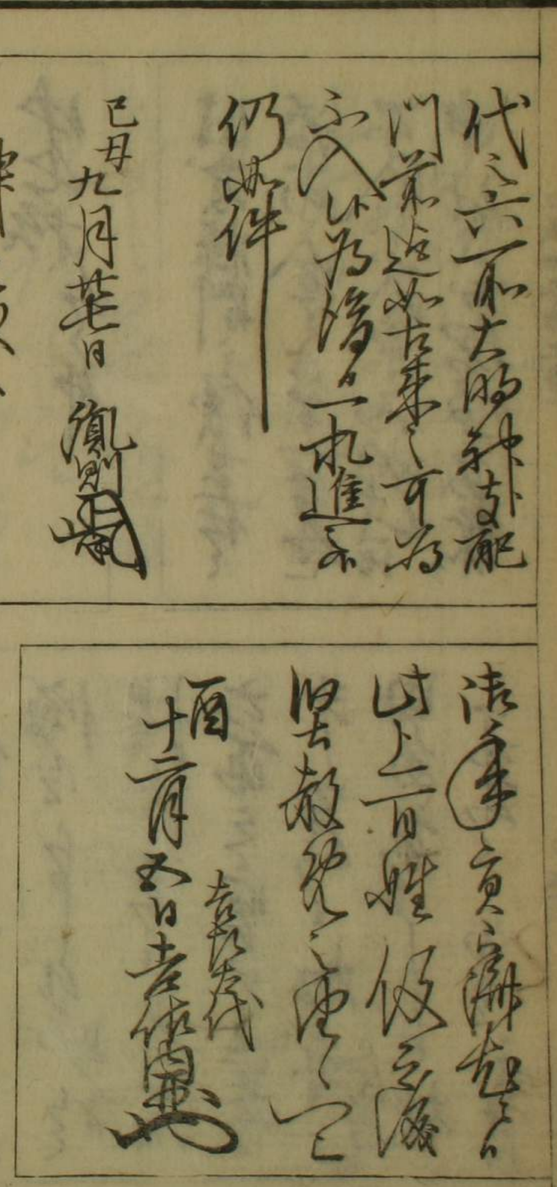
天正十八年之

中山括ヘ被申

十月廿日

此度棟別之儀者
為御造営之事候
不入ニ候東西ハ
申付候お家老を預け

中宗家之法令之
附分其方ニ百姓役
之御付之事可申
備之白山ニ於
得其意之人若
之家之宮之法奏
汁等之勝手
田畠等ニ下知
之事可申定厚



高城家畧傳ニ小金城三代下野守亂吉法名傳照玄心大居士永禄六月十二日卒 四代下野守亂辰法名関相玄酬大居士天正十七年十月十六日卒 五代源二郎亂則法名庭室玄拍大居士慶長八癸卯八月十七日卒年三十三

吉田佐太郎ハ國初御代官之當時陣屋ハ久真間村ニアリシトノ久真間條見合スベシ

國分山金光明寺　國分村ニあり藥師堂領十五石二斗餘　慶安二年己丑八月　新義真言宗京師醍醐三寶院ニ属ス　元八支院廿六宇ありしとそ　本尊藥師如来　立像六尺余元地ハ昔堂と宮ありしと地なり

聖武天皇の勅寄なり　又釋迦堂ニ丈六の尺八唐ハ小尺なりしの一尺八曲尺の六寸六分六厘小者なり　の釋迦の座像并に左右の挾持二軀樓門の上の古き釈迦の像ハ共ニ此　天皇の寄せる所と云中興ハ紫海法印と云　寛永十八年十月廿四日示寂ス　○寺記ニ瑠璃尊像長一丈ありしものと置とあり　○續紀ニハ觀音菩薩像一軀高七尺と見ゆ

續日本紀ニ神龜五年十二月金光明經六十四帙六百四十卷頒於諸國國別十卷中畧經到日即令轉讀　天平九年三月詔毎國令造釋迦佛像一軀挾持菩薩二軀兼寫大般若經一部一十卷　十二年九月國別觀音菩薩像一軀高七尺并寫觀世音經　十三年正月故大政大臣藤原朝臣家返上食封五千戸二千戸返賜其家三千戸施入諸國分寺以充造丈六佛像　三月毎國僧寺施封五十戸水田廿町尼寺水田十町僧寺必令有二十僧其寺名為金光明四天王護國之寺尼寺必令有十尼其寺名為法華滅罪之寺両寺相去宜受教戒若有闕者即補満其僧尼毎月八日必應轉讀最

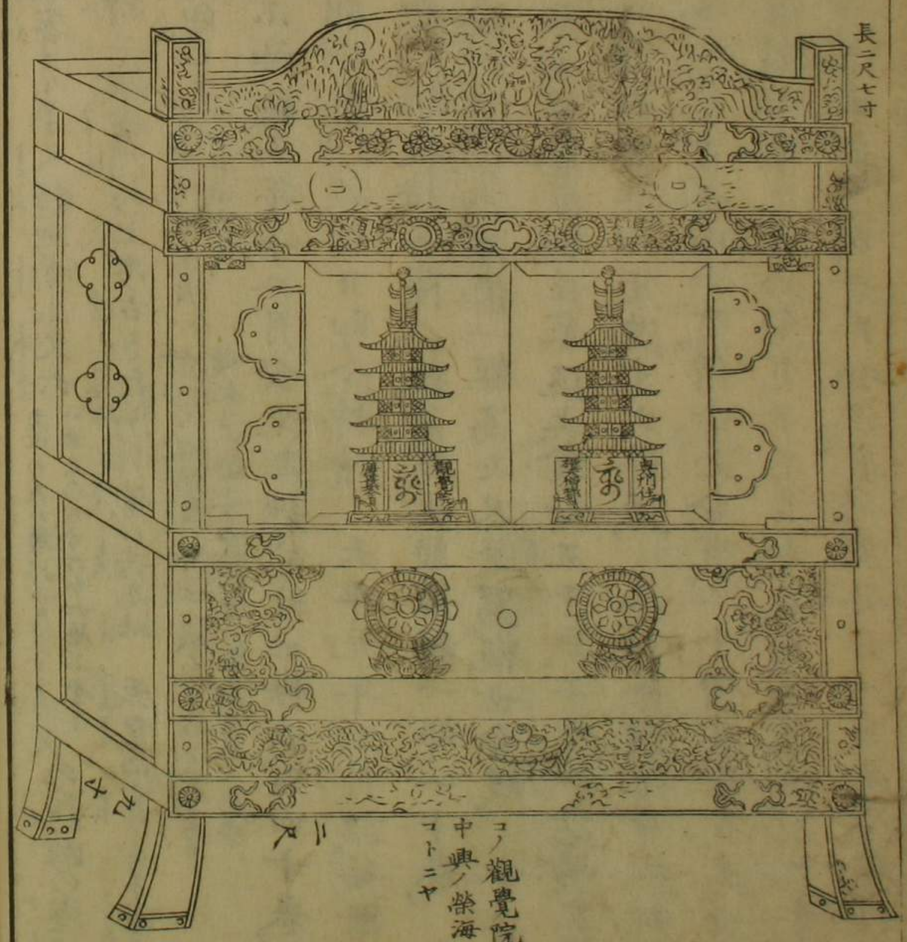
古笈の圖

此地昔堂ト宇スル林藪ノ中ニ駁シク敗瓦ヲ山積スサレト天平ノモノトハ見エス又礎石各所ニ散在ス其巨偉當時ノ虛費想スルニ足レリ

可翁瀧見觀音

馬遠花鳥

陶以政桃画



勝王經毎至月半誦戒羯摩毎月六齋日公私不得漁獵殺生國司等宜恒加檢校（四天王トハ多聞天王持國天王增長天王廣目天王ナリ　持國ハ地名ノ殘れり其餘の三所ハ何方ぞや今知ラヘし）十七年九月甲戌令京師及諸國寫大般若經合一百部又造藥師像七軀高六尺三寸并寫經七卷　天平勝寶元年秋七月乙巳宣諸寺墾田地諸國分金光明寺寺別一千町諸國法華寺別四百町　天平寶字二年秋七月戊戌勅國別奉寫金剛般若經三十卷尼寺十卷恒例金光明最勝王經並令轉讀（今昔物語二十六ノ今昔藥師寺大和國の家勝會と云ふことえたり　考附のこまかなるひやうれつ）又（巻廿二）太后仁慈志在救物創建東大寺及天下國分寺者本太后之所勸也

○延喜主税式小國分寺料五万束藥師寺料三万五千束文殊會料二千束

○類聚三代格（巻三）小國分寺事　勅朕以薄德忝承重任未弘政化寤

寐多慙古之明主皆能光業國泰人樂災除福至何修何務能致此
道頃者年季穀不登疫癘頻至慙懼交集唯勞罪己是以廣為蒼生
遍求景福故前年馳驛增餝天下神宮去年普令天下造釈迦弁尼
佛尊金像高一丈六尺者各一鋪弁寫大般若經各一部今春已来
至于秋稼風雨順序五穀豊穰此乃微誠啓顛靈貺如答載惶載懼
無以安寧案經云若有國土講宣讀誦恭敬供養流通此經王者我
等四王常来擁護一切災障皆使消殄憂愁疾疫亦令除去所願遂
心恒生歡喜者宜天下諸國各令敬造七重塔一區弁寫金光明寂
勝王經妙法蓮華經各十部朕又別擬寫金字金光明寂勝王經每
塔各令置一部所冀聖法之盛与天地而永流擁護之恩被幽明而
恒満其造塔之寺兼為國華必擇好處實可長久近人則不欲薫臭
所及遠人則不欲勞衆帰集國司等各宜務在嚴餝無盡潔清近感
諸天庶幾臨護布告遐邇令知我意又有諸願等條例如左

一每國僧寺尼寺各可施水田一十町

一每國造僧寺必令有二十僧其寺名為金光明四天王護國之寺
尼寺一十尼其寺名為法華滅罪之寺両寺相去宜受教誡若有
闕者即須補満其僧尼每月八日必應轉讀寂勝王經至月半誦
戒羯摩

一諸國置上件寺者每月六齋日公私不得漁猟殺生國司等恒加
檢校

一願天神地祇共相和順恒將福慶永護國家

一願開闢以降先帝尊靈長幸珠林同遊寶刹

一願太上天皇大夫人藤原氏及皇后藤原氏皇太后子已下親王
及正二位右大臣橘宿祢諸兄等同資此福共向彼岸

一願藤原氏先後太政大臣及皇后先妣從一位橘氏大夫人靈識恒奉先帝而陪遊淨土長願後代而常衛聖朝乃至自古已来至於今日身為大臣竭忠奉國者及見在子孫俱因此福各繼前範堅守君臣之禮長紹父祖之名廣洽群生通該庶品同解憂惱共出塵籠

一願若惡君邪臣犯破此願者彼人及子孫必遇災禍世々長生無佛法處　天平十二年二月十四日

○鐘識小　清和天皇之世權少掾貞世新鑄鴻鐘一口以箕箒而后秘密之教風盛興云々建長八年丙辰九月廿四檀越平氏再獲梵鐘聖武之世以来千有餘年鑄鐘三矣云々寶暦三癸酉年三月沙門亮英謹誌傳燈大阿闍梨法印勝快とあり古昔香華の盛なりし推知るべし寺内小礎石數箇あり昔堂と称する地より堀出せしと云昔堂八寺内

所藏文書

制札

右軍勢甲乙人濫妨狼藉事堅令停止畿内若違犯輩者速可注進仍如件

金八小金十九ベシ　子八蓋天正六年十月

國分寺之事者一旦任雖令寄進毎度仕置法堂造営掃地勤行可被仰付旨対貴寺於遠国推出之輩紀四不撰老幼悉召捕放可申付并如前々寺領不入儀可令安堵可被仰付今度書状之趣勝頼公御家督之事以為後日以私中長仍如件

天正十三年乙酉
二月三日

國分寺

覚書付申条々

一　國分寺之事、古跡之儀殊近年者
清浄之躰儀無之、或ハ不様庭之掃除
以下も無之、猥在家同前ニ有之候事

一　御堂造営以下修復不致、是又
大破ニ及候故、物忌伽藍不思議代拾
相立候様修復可申処、自分持ニ仕、竹木致
伐取候而致混乱候事

一　十二坊共ニ前々ハ十二軒有之候処、
付而勝手ニ寄々田畑ニ致し、屋敷ニ仕候事

一　自今以後当住住付置、諸事ニ付洒掃之家
仕置堅固ニ不絶とも付寺務ニ修理相定
傳申者以右之通ニ相定候所

右之四ヶ條相改候ハ、以来之為ニ書付を以相残候

一　不絶仏法修行之事、依之法事掃除之
厳密ニ申付、当寺之儀者当国之法流之本寺ニ候間、
当寺中ニ而相勤候様ニ可被仰付事

一　此上十二坊法住不残候ハヽ、向後可為無沙汰事

一　此上毎年当住ハ仕置等連ニ相可掃除
并門前之家ニ申付、寺務之儀寺塔ニ至迄
相守候様ニ可被仰付候、右之通相守可申
事ニ候、若相背候ハヽ可為曲事

天正十三年乙酉
二月三日　胤則（花押）

國分寺
法川坊中
参

二丁程西北の方ふ猶殘れるも悉く散して隴畝の中にあるを當時佛事の巨費想あり今畠となる

なる小足社り三若清行の意見封事に上下競傾産造寺捨田施丁極天平國分二寺各用其国四税而天下之費十之五と言ハまさることふかそ

寺より真間へ行方社坂をゝ古此地小國分寺社持國天の堂舍ありし所

なりとゝ〳〵

〈真世詳ならに蓋下総の椎小據ならん平氏ハ頼朝なる所屋〉

成田叅詣記卷一終

貸本 元園町 屋藏

江川仙太郎刻